

MUSEUM ちば

千葉県博物館協会研究紀要

目 次

【特集】博物館が結ぶヒトとマチ

はじめに

[平成28年度]

千葉県博物館協会研究報告会

- 講演1 「博物館とボランティア—さまざまな人・団体との連携—」
国立科学博物館事業推進部広報・運営戦略課 石川 昇… 2
- 講演2 「葛飾を極める—区民との協働の軌跡—」
葛飾区郷土と天文の博物館 学芸員 谷口 栄 ……11
- 講演3 「博物館ボランティアのすすめ—葛飾区郷土と天文の博物館
における実践を通して—」
葛飾区郷土と天文の博物館 専門調査員 五十嵐 聡江…18
- 質疑・討議…23

[平成29年度]

千葉県博物館協会研究報告会

- 講演1 「町おこしでできた金谷美術館～地域での取り組み～」
金谷美術館 館長 鈴木裕士 ……31
- 講演2 「房総の山のフィールド・ミュージアム事業と地域のかかわり」
千葉県立中央博物館 房総の山のフィールド・ミュージアム担当
主任上席研究員 尾崎煙雄 ……38
- 質疑・討議…45
- 千葉県博物館協会加盟館園一覧…52

第45号

2018年5月

千葉県博物館協会

はじめに

千葉県博物館協会におかれた調査研究委員会では、平成28・29年度事業として、「博物館が結ぶヒトとマチ」というテーマを設定して活動をして参りました。

平成28年度は「ヒト」の側面から「地域博物館とボランティア再考」というサブテーマのもと研究報告会を開催しました。報告会では、国立科学博物館事業推進部広報・運営戦略課の石川昇氏より博物館ボランティアに関わる理論についてお話いただいた後、葛飾区郷土と天文の博物館学芸員の谷口栄氏と専門調査員の五十嵐聡江氏より実践報告をいただき、あらためて地域博物館とボランティアの関係について、その意義やあり方について認識を深めることができました。

また、平成29年度は「マチ」の側面から「博物館と地域づくり」というサブテーマのもと研究報告会を開催しました。報告会では、金谷美術館館長の鈴木裕士氏と千葉県立中央博物館房総の山のフィールド・ミュージアム担当主任上席研究員の尾崎煙雄氏による事例報告の後、コーディネーターの和洋女子大学教授の駒見和夫氏により質疑討論を行い、博物館が地域資源を活かしながら、どのように地域づくりに関わっていくのか議論を深めることができました。

この2年間の活動をとおして、博物館がどのように地域と関わっていくのか、その中で地域の人や資源をどう活かしていくのか、意義や課題を再認識することができました。

終わりに、当委員会の調査にご快諾をいただき、本誌にご発表を掲載させていただきました各位・関係機関をはじめ、ご協力をいただきました皆様に感謝申し上げる次第です。

平成30年 5月

平成28・29年度調査研究委員会

理事 望月 幹夫（松戸市立博物館）

平賀 洋一（千葉県立現代産業科学館）

委員 阿部 勝人（八千代市郷土博物館）（平成29年度）

石渡 克彦（千葉県立現代産業科学館）（平成29年度）

上野 純司（千葉県立現代産業科学館）（平成29年度）

奥住 淳（芝山町立芝山古墳・はにわ博物館）（平成28・29年度）

柏木 一郎（松戸市立博物館）（平成29年度）

常松 成人（八千代市立郷土博物館）（平成28年度）

手塚 雄太（鎌ヶ谷市郷土資料館）（平成28年度）

平成28年度 千葉県博物館協会研究報告会

テーマ：「博物館が結ぶヒトとマチー地域博物館とボランティア再考ー」

1. 日 時 平成 29 年 3 月 14 日 (火) 午後 1 時 20 分 ~ 4 時 10 分
2. 場 所 千葉県立現代産業科学館研修室
3. 主 催 千葉県博物館協会・調査研究委員会
4. 日 程 開催挨拶

趣旨及び日程説明

講演 1 「博物館とボランティアーさまざまな人・団体との連携ー」

国立科学博物館事業推進部広報・運営戦略課 石川 昇 氏

休憩

講演 2 「葛飾を極めるー区民との協働の軌跡ー」

葛飾区郷土と天文の博物館 学芸員 谷口 栄 氏

講演 3 「博物館ボランティアのすすめー葛飾区郷土と天文の博物館における実践を通してー」

葛飾区郷土と天文の博物館 専門調査員 五十嵐 聡江 氏

質疑・討議

閉会挨拶

講演1「博物館とボランティア—さまざまな人・団体との連携—」

国立科学博物館事業推進部広報・運営戦略課 石川 昇

私は国立科学博物館で平成元年から15年間ボランティアの担当をしていました。その後、港区にある自然教育園という国立科学博物館の附属施設に行きましたが、そこでも国立科学博物館のボランティアがいましたし、昨年3月まで3年間勤務していた国立室戸青少年自然の家でもボランティアを導入していて、研修の講師を務めていました。また、ボランティアについて各地の博物館や港区内や室戸市内のボランティア団体に話をしたこともありますので、多少は語れるかと思います。



1 博物館におけるボランティア活動の概要

それでは、レジュメの『博物館におけるボランティア活動の概要』というところ（レジュメ）から始めます。

(1) 博物館ボランティアのはじまり

昭和30年代から、例えば科学系の博物館でいうと、昆虫の標本を持っていて、昆虫についての知識もある方がいる。その昆虫標本を寄贈しようとか、あるいは展示をやるのでしたら「ぜひ使ってください」とか、あるいは博物館のほうから、「何か説明などしてください」とかというのにはあったと思います。要するに、特別な知識だとか能力だとかを持っている特別な人と博物館の関係でいろいろなことをお願いしていたということは、前々からあったと思います。

けれども一般市民の方を対象に、公募をしてボランティア制度を作ったというのは、1974年（昭和49年）の北九州市立美術館が開館するときに、市民対象にボランティアを募集したというのが始まりです。それから美術館の展示解説ボランティアというのが都道府県立の美術館を中心に広がっていきました。静岡県立美術館だとか岡山県立美術館だとか。あるいは都道府県立ではないけれども、徳川美術館だとかで、展示を解説するボランティアが広がっていきました。また同じ年に、東京動物園ボランティアというのも誕生しています。ですけれども、美術館のボランティア以外の分野では、あまり広がらなかったと思います。

それが広がるきっかけになったのが、昭和61年に国立科学博物館が、青少年に指導助言を行うボランティア制度を導入したことです。そのきっかけは参加体験型の展示を作ったことです。この現代産業科学館にもたくさんありますけれども、ああいったようなものです。理工系の、スイッチを押したり、ハンドルを回したり、人が力を加えることによって装置が動いて、その場で実験を見ることができるだとか、原理が分かるだとか、そういうものを導入しました。私どもの博物館では、それに加えて、自然の森の中に入って、いろいろな樹木を見るだとか触れるだとか、動物の剥製や化石に自由に触れるだとか。そのようなものを作ったのです。そのときに、それぞれの展示に解説がありますが、子どもは解説を見ないで、スイッチを押したり回したりというふうに本能的にやっけてしまっ、仕組みが動くまで待てないとか、あるいは動いても何だかよく分からないとかということがありました。そこで、ボランティア制度を導入し、子どもたちと展示をより効果的に結び付け、理解してもらおうと、面白いとか仕組みが分かったとか、そういう知識の発見、感動を味わってもらえるようにしようと、それもただ教え込むのではなくて、子どもが自ら分かるようにしむけるような、声かけ、助言の形でボランティアにやってもらおうとしました。そのことはボランティアにとっても、やりがいのあることであるだろうと想定し、自分の蓄積した知識や研修した成果を子どもに与えることによって、子どもが喜び、感謝されるということもあるだろうということで、導

入しました。今、30年以上経っていますが、そのボランティアの人たちはまだ何人もおられます。私は平成元年に国立科学博物館に入りましたが、当時はいわゆる「幽霊ボランティア」がたくさんいました。それは、博物館ボランティアを導入するときに、そのときにどんどんなってくださいと、活動しないような人までたくさん入れてしまったのです。活動する人はうんと一生懸命やって、活動しない人は全然やらない。いつ来るか分からない人もいた。それで、中でぎくしゃくして困った状況になったので、幽霊状態の、活動するかどうか分からない人たちには、ボランティアをやめていただきました。ボランティアは活動する人間だけにして、しっかり一週間に一度曜日を決めてやるだとか、今日は誰が来るのかを分かるように変えた。きちんと活動するボランティアの集団にすることが第一目的で、それがあつた程度うまくいくと、今度は人がうんと減ったので、活動の意欲が充分で知識も能力も高い人たちを入れるため、新聞に募集を掲載してもらい、かなりの人数を増やしました。今までいろいろな活動をボランティアの方たちと館のほうで、開発し、お客さんにとつても博物館にとつても良いだろう、そしてボランティアにとつてもやりがいがあるだろうと思われる新しい活動を作つて行つた経緯があります。そういうことがあつて、やりがいを感じていただくボランティア活動が今まで続いています。

昭和62年に北海道開拓の村博物館は、野外建物の展示解説と演示を行うボランティアを導入します。展示の建物の中には交番がありますが、ボランティアは当時の巡査の格好をして、ボランティア自身が巡査の展示になります。そしてその巡査の格好をして交番の解説をする。演じて示す「演示」という活動にしたそうです。開拓の村としては、大丈夫かな、果たしてやってくれるのかな、という心配もあつたようですが見事に成功して、お客さんからは一緒に写真を撮つてくれとか面白いとか、すごく喜ばれました。そしてボランティアの方も、やりがいがあるということで、今までも続いているということです。

平成4年には、葛飾区郷土と天文の博物館の考古学ボランティアが発足しました。はたして埋蔵文化財の調査を、一般の市民ボランティアがやる

というのは、大丈夫だろうか、いろいろな人がだいふ心配したと思います。考古学が好きな人ならば、もし何か珍しいのが出てきたらポケットに入れてしまうのではないかと、いろいろな心配があつたと思いますが、見事に20年以上続いています。

それまでは、展示の解説が中心で、展示の解説ももちろん重要ですが、いろいろな活動が、ボランティアの方と博物館とで話し合つて、それと需要というか、お客さんの方々に喜んでいただければ、あるいは調査研究ならば研究者が喜んでくれれば、いろいろな活動が可能なんだということ、いろいろな活動が開発されてきました。

(2) ボランティアの導入状況

次に(2)の『ボランティアの導入状況』です。先ほど「今の博物館の数が1400」と申しましたが、平成27年のデータですので、多少違っているかもしれませんが、言いたいことは、国立科学博物館がボランティアを導入した昭和61年は10パーセントいってなかつたのですけれども、平成26年には、43パーセントを超えたということです。この間にこれだけボランティアの導入館数が増えたということです。

博物館類似施設もかなり増えました。初めは10パーセントを超えるのに結構時間がかかりましたけれども、今は20パーセントを超えています。さらに「一館あたりの入場者数」を出すと、面白いです。3年毎に行われる社会教育調査の、平成26年調査の例ですが、博物館数は平成20年以降、まあ平成10年以降くらいから、館数の伸びが止まってきた。特に平成20年以降は止まって増えなくなつた。平成の大合併なんか、減らす原因ではあるのかもしれませんが、館数は増えなくなつてきたが、入館者総数はそれほど変わらない、1館あたりの平均入館者数というのが、初めはうんと増えてたんですけども、だんだん減つてきて、減つてきたけれども、その減り方が止まっている。もしかしたらこの辺のことは調査をすれば面白いし、研究対象になるかもしれません。ディズニーランドの影響とか、いろいろなゲームだとか学校の状況だとか、どのくらい影響があるのか、ということです。

(3) 主な活動内容

まず、「見学者の支援」です。展示の案内、解説、美術館ではよくギャラリートークといえます。それから体験の支援、展示解説資料の作成などです。私は北九州市立美術館に行ったときに「常設展示解説」を体験しました。まず展示室の前に机があり、そこに「何でも聞いてください」「時間で常設展示を案内する」というのがありましたので、それで案内してもらいました。常設展示の絵画作品の右下のほうにチラシが置いてあり、そのチラシは学芸員が書いている場合と、ボランティアが書いている場合があります、ボランティアの方も解説を書くくらいの専門的な人もいるのだなと思ってびっくりしました。

江戸東京博物館は、外国人の支援や障害者の支援などが活発です。展示解説が何カ国語にも対応している。障害者の支援でも、目のご不自由な方が来ると案内するだとか、手話である程度案内するというところもしています。

次に「学習の支援」として講義、講義補助、観察、工作、実験、制作の指導などがあります。制作は美術も含めます。参考資料の作成とか。ショーや劇というのは日本では多くはないと思いますが、している館もあるようです。国立科学博物館のボランティアでは他館のボランティアを兼ねてる人が結構います。日本科学未来館のボランティアもしている方が「未来館でね、ショーをやらしてもらってるんだよ」と喜んでいたりしました。友の会業務からボランティアが生まれた、という館では「友の会業務」などがあります。

さらに、「調査研究」として、発掘ですとか標本資料の整理などがあります。後ほど国立科学博物館で、植物標本の資料を整理している写真が出てきます。データ入力とかをボランティアが行っている博物館もあります。20年ぐらい前、全国科学博物館協議会の海外研修に行かせてもらいまして、いろいろな自然科学系の博物館を見してきました。そこで、20年ぐらい前ですから今はない活動だと思えますけれども、サンタバーバラの自然博物館の研究室で70代後半か80近くのおばあさんが一生懸命カードをコンピューターに入力していました。実に一生懸命やっていたけれど、ものすごい量がまだあったようで、大変

そうでした。コンピューターへの入力作業は、この博物館でも大変だったと思いますが、よくこんな仕事をボランティアのおばあさんがやっているな、と思いました。すると、研究者が「どのくらいできたの？」と聞くと、3000件とか、輝いた顔して言いました。役に立っているということがうれしいのでしょうか。もちろんデータ入力しているモノが、そのおばあさん自身にとっても興味あるものなのかもしれないし、やりがいを感じているような気がしました。このほか、新聞記事の整理、展示関係では展示を作る、動植物系だと飼育する、育成する、というのがあると思います。

「美化」もあります。清掃をボランティアがするという事例はあるかどうか分かりませんが、生け花はよく聞きます。清掃も1年に1回だとかに2回だとか、一斉清掃というようなものをボランティアもやる、というのがあります。

『その他』として、ミュージアムショップの運営。この写真は北海道の道立近代美術館を見に行ったときのものです。喫茶コーナーの運営は、目黒区美術館を見にいった、コーヒーを飲んできましたが、すごくおいしかったです。

これは十何年前の写真ですが、国立科学博物館の理工系の参加体験型展示です。黄色い服を着た方がボランティアです。これは自然系展示で、スイッチを押すと鳥の鳴き声が聞けます。どこに鳥がいるのかを探させる展示ですが、なかなか見つかりません。この写真はガイドツアーで、代表的な展示をピックアップし、それにボランティアの方がいくつか加えて、約1時間で館内を案内するものです。この図書資料コーナーはボランティアがやっています。また、ボランティアがグループになって、教育普及活動を何かやりたいというときには、館に、企画書を出してもらい、審査してOKならば、やってもらいます。これは冬芽のグループでちょうど今頃、活動する頃ですけれども、冬芽の観察をしたり、木のガイドをして歩いたりしているグループです。これは「科学ショー」で、見学者の前のほうでいろいろな実験なんかをします。場合によっては、「お客さん、ちょっとこちらへ1人お願いします」とか言って手伝ってもらったりします。この写真は、植物のさく葉標本の整理で、それまで植物研究部でなかなか整理

できなかったものを、退職数年前の研究者がどうにかしたいということで、ボランティアがやってくれるかどうかということで、ボランティアに活動の希望を聞くと、十何人かが手を挙げてくれて、やり始めました。新聞にパラパラになっていたので、ちゃんとした台紙に貼って、ラベルを作っていく仕事です。

これからはですね、他の館です。これは平塚市博物館です。平塚市博物館は、「放課後博物館へようこそ」という本を浜口館長が書いていましたが、市民がいろいろな形で博物館の活動に参画しています。ボランティアで参画したり、いろいろ研究会で、学習活動をしながら収集したり展示をしたり、いろいろなことやっています。これは「空襲の企画展」だったと思います。この赤いのが、この辺に爆弾を落とされたっていう展示で、ボランティアが説明してくれました。

次はアクアマリン福島です。アクアマリン福島は、いわき市にある福島県立の水族館です。ここは開館から少したってボランティアを導入することで、ボランティア研修で話をさせてもらいました。この展示は船をこいで対岸に行くのですが、この上のがモニターで、ちゃんと対岸の目的地に行けるかどうかモニターで見ながらこいでいきます。水族館ですけどこんな展示もあります。これは、いかにも水族館らしいタッチプールで、この黄色い人がボランティアで、生き物に触らせてもらえます。

それから国立科学博物館では、20年前から15年ぐらい前にかけて、全国博物館研究協議会っていうのをやっていました。結構人気があって200人ぐらいの定員でやっていたんですけども、全国各地からたくさん来てくれました。会議の運営にもこの科学博物館のボランティアがたくさん携わっていて、司会、受付、案内係だとか助言者などの形で関わってもらいました。

これは日本科学未来館で、「ボランティアメッセ」という名前だと思いましたが、ここに松戸シティガイドが来ていますけども、いろいろな所から来て、展示やこんな活動をしているというパネルを見せていました。国立科学博物館も江戸東京博物館もやっていて、私はこの人力車に乗せてもらいました。

これまでのものは古いですが、これは現在進行形です。私はおとし、高知市立龍馬の生まれたまち記念館に行ったんですけども、モノはあまり持っていません。展示はパネル、作り物、モニターが中心です。それでは、なぜ龍馬の記念館を作ったかという、ここはまさに龍馬が生まれた街なのです。龍馬がここで生まれ育ち、龍馬が子どものころ剣道の訓練をしていた道場はこの辺にあったとか、友達の饅頭屋の家はこの辺だとかがわかっている所です。これがトップページで、この博物館ではボランティアによる観光ガイドが一番の売りです。参加しましたが、すごく面白かったです。説明が非常に上手だったし、街に愛着を持っている方たちで、龍馬関係以外のことで質問しても答えてくれてすごく楽しかったです。

2 博物館におけるボランティア活動の意義

(1) 博物館における意義

まず博物館は、人も予算も限られているわけですから、やれる範囲に限界があります。ボランティアをはじめより多くの人々の知識、技能、視点、労力まで入れてもいいような気がしますが、多くの人々の力を博物館活動に生かす、そのことによって地域に根差す、地域とともに歩む博物館としての活動をしていくという視点が重要だと思います。

博物館は職員が限られています。今では定年退職後も再雇用制度がありますけれども、いたとしても65歳を越える高齢者はいないでしょう。また、高齢者のほか、障害者、外国人、さらには青少年など、博物館の職員にはあまりいないと思います。しかし、地域社会にはそのようないろいろな方がいらっしゃいます。地域住民のいろいろな視点、期待だとかのニーズを知るということはとても大切ですが、それは地域の人に博物館に入ってもらおうことで、いろいろなことが分かってきます。何かをやろうと思ったならば、こんなことがあるよ、こんなことを知っていますよ、とか教えてもらえます。たとえば、ちょっとした企画展をやったら、その電気の線は1センチの高さであっても人が突っ掛かるよと言われて、確かに高齢者が突っ掛かるとかですね。いろいろなことを教えてもらいました。

それから、もちろん博物館活動の拡充になります。今までやっていなかったことをやるようになった。それまで常設展示でボランティアが活動ということは、国立科学博物館はめったにやらなかったのですけれども、ボランティアが1日何回もガイドツアーやるようになったとかです。残念ながら、今はガイドツアーはやっていないのですが、代わりに、あちこちの展示室に常設のボランティアが常駐していて、展示物を見せたり触らせてあげたりとか、展示の説明をしたりするワゴン活動というものに移っています。博物館活動の拡充が、博物館に新たな魅力を付加、拡充させます。また、ボランティアならではの魅力というものがあります。ガイドツアーをして、そのお客さんとボランティアが、親しくなって話をするだとか、東京に来ると会うとかですね。国立科学博物館のガイドツアーはなくなりましたが、私を知る限り、十何回参加したという人いました。な人によって語り口だとか得意分野が違うんですね。鉱物、岩石鉱物が得意な人、植物が得意な人だとか。また、面白い人は人気があつたりします。そういうことで、多くの人々に博物館として学習の場、それからボランティアに対しては社会参加、社会還元を提供することになって、地域学習、文化交流、コミュニケーションの場として、博物館が機能を果たすようになるのだということが言える、と思います。そして博物館がにぎわって、集客にもなる。博物館の施設がにぎわうということは、地域のにぎわいにもつながっていくということです。

あるとき神奈川県立歴史博物館に行きましたら、展示室がかなり広いのですが、私が展示を見終わった後、入口の立体模型みたいな地図の所で、5～6人で話し始めているのに気がつきました。なんかものすごく一生懸命しゃべっていました。「何だろう、この人たちは、おじいさんが多いけれども」と思ったら、ボランティアでした。一生懸命勉強していて、こんなに勉強しているのか、この展示はそんなに面白いものなのか、知識欲を満たすようなものなのかと、私も隣で聞いて驚きました。ボランティアの方達がいて、博物館の中で展示解説だとか案内だとか、またはそれ以前の、学習会や研修をする姿も、お客さまに

とってはすごく面白く、興味を触発されるものです。博物館として面白みや価値というものを、お客さまがたに示せる人たちが、ボランティアなのだといえます。

(2) 博物館利用者における意義

博物館でボランティアが活動すると、博物館の機能が拡充し、博物館がより魅力的になります。先ほど龍馬が生まれたまち記念館に「土佐っば」というガイドがありましたが、これはボランティアがいなければできない活動です。博物館の外で何とかコース、何とかコースといろいろとコースがあつて、すごく面白くて人気がある。それから龍馬パスポートという、観光のパスポートがあつて、そのガイドを体験するとパスポートのスタンプが押される。それがすごく観光したいという意欲を喚起するもので、うまくやっているなと思います。

また、博物館の中でも、ボランティアの方だと分かるような着物を着ているだとか、バッジや腕章をしていれば、何がどこにあるとか聞きやすいです。このように、ボランティアがいることがサービスポイントが増えることになるというところはあります。

それから、ボランティアは、専門的な知識を持っている人もいるけれども、専門的な知識を持つようと思って努力している人が多いわけです。一生懸命勉強しようと思う人が多いのです。それは、その分野が好きだし、間違ったことを言つてはいけないと思うからです。その一生懸命さ、そして明るさ、元気の良さを利用者は好ましいと思うし、同じ市民の気軽さで、こんなこと専門家に聞いたら恥ずかしいよな、聞けないよなというのも、ボランティアなら聞けるということがあります。

私は、身に染みて感じたことがあります。札幌彫刻の森野外美術館でボランティアの方がガイドをしていました。受付で30分コースと1時間コースでしたけれども「どっちのコースにしますか」と言われて、「よかったらじっくりゆっくり、たくさんやってください」と言いました。後ろのおばさんたち3人も一緒に行きますということで、2時間半やってもらいましたが、それは、彫刻が、誰が、いつ、素材が何で、何時代に作られたとか、

何というタイトルで何故そのタイトルが付いたのかとか、それらの基本的事項の他に、そのボランティアの方の思い、この彫刻と出会ったのは30年前の東京で、妻となる前の彼女と初めて見たという話などいろいろ聞けたからで、たいへん面白かったです。あるいは、こっちから見るようになってからタイトルがこっちについているけれども、こっち来ると横顔が面白くきれいに見えるとか教えてもらったりと、すごく楽しかったです。

(3) 地域社会における意義

地域の文化活動が盛んになる、地域の教育力が増す、観光力が増す。先ほどの「土佐っば」なんかはそうです。地域における人の動き、交流が増す。

そして、青少年へ良い影響を及ぼすということもあると思います。青少年は、親と学校の先生と塾かなんかの指導と、学童に行ってる子どもは学童保育者の関係ぐらいとしか大人と交流しない子が多い社会になっている。そういうなかで、ボランティアが活動する博物館で、青少年が見知らぬ大人と交流して、その大人が声をかけてくれて、これをやったら面白いよとか、どうしてこうなるんだろうねとか、君どう思うとか、声をかけてくれるというのは、すごく良い影響があるのではないかなと思います。

それとボランティア活動は、昔は福祉の活動ばかりでした。平成7年が阪神淡路大震災で「ボランティア元年」と言われていますが、震災ボランティアの重要性が認識されるようになりました。一方、博物館でのボランティア活動は、まだまだ知らない人が多い。そこで、そういう博物館ボランティア活動、文化的、教育的なボランティア活動が社会にとっても重要で色々な意義がある、博物館と博物館利用者の両方にとっても社会にとっても意義がある、ということを知ってもらおうという意味でも、博物館でお客さまの見えるところでボランティア活動をする意味があるのではないかと、地域社会における意味があるのではないかと、思っています。

(4) ボランティアにおける意味

①「ボランティア」の考察

よく「ボランティアでやる」という言い方があります。テレビのインタビューで「ボランティアでやってるんですよ」というふうに答えている人がいますけれども、それは「タダでやっているんです」というニュアンスが多いです。

しかし、さまざまなボランティアについての本だとか、社会福祉協議会やボランティアセンターによるパンフレットには「ボランティア活動は自ら進んで社会や他者のために」「対価を目的とせず」「自分を提供する活動である」と書いてあります。これが3原則です。東京都のボランティアセンターなどは、4原則だとしていて「現状を良くするため」だという事項も付け加えています。これは「先駆性、開発性、創造性」と言えます。5原則などと言っている人も少ないながらも、それは、その場だけではなく続けて、という継続性というものです。いずれにしても、それらの3原則、「自ら進んで」という自発性、それから「社会や他者のために」という「社会性だとか利他性、公益性」、タダでというのは、無償性というお金の部分と、それだけではなくて名誉もということ、対価を目的とせずということ、これをやるからお金にならないか、だけではなく、例えば何かの会長にしてほしいとかいうものも含めてです。このように対価を求めるのではなく、自ら進んで自分がやるべきだと思うから、社会や他者のためやりたいからやるのだ、ということがボランティア活動の原則だと言われています。

しかし、よく考えてみれば、「誰かのために」ということが重要だと思います。他人や社会のためにとかです。例えば福祉のボランティアでいうと、痛みを感じている人がいる、苦しみ、悩み、悲しみを感じている人がいる。そのことをよく知って分かち合う。「いのちの電話」なんてありますよね。ずっと話を聞いてあげる「傾聴ボランティア」とか言いますが、大変なことです。あるいは、今日も結構寒くて雨が降っていますが、こんな日に高齢者のために、買い物をするとかです、自分の時間とか労力とかを割いて相手の痛み、苦しみ、悩み、悲しみなどを少しでも軽減させてあげる、それは「分かち合い」という言い方ができるのではないかと。そして、そうであるなら

ば、教育的な活動、文化的な活動の知の発見、感動、喜びなども分かち合うという意味で言えば、同じことなのかなと思います。ボランティアは思いを共にして伝え合い、分かち合い、恵み合う活動なのではないか。してもらった人はありがとうございます、良かったです、助かりましたとか声をかけてあげる。あるいは買い物をしてもらったら、これちょっとだけど、ほんの気持ち、と疲れた人にチョコレートか飴をあげて分かち合おうとするかもしれません。そのように、ボランティアというのは、する側もされる側も、福祉だったら痛み、苦しみ、悩み、悲しみを、教育的、文化的な活動ならば「知識は面白いよ、こんなに美しいよ」と、発見や分かることが喜びだよということを教えたいということがありますけれども。教えながら得ることがあるというか、教えながら教えてもらう場合もありますが、知識や感動を分かち合う、恵み合う活動ということが言えるのではないかと思います。

ボランティアは総じて「人のため」ではありませんけれども、自然のためというのもあります。地球環境のためというのもあります。広く言えばボランティアは、地域のために社会のために、地球のためになる活動なのだと思います。それも現在だけでなく、将来の地域のために、です。昨日「鶴瓶の家族に乾杯」を見た人はいませんか。鶴瓶とゲストの人が東松島市に行きました。東松島市は津波によって、獅子舞の大切な道具が流されて全部駄目になってしまった。そこで、それまでは獅子舞の人、笛の人、太鼓の人とかいろいろグループに分かれていて、お祭りのときだけ一緒だったけれども、この獅子舞の活動っていうのは獅子舞をなくしちゃいかんということで、地域のそういう人たちがみんなつながった。今俺たちがやらなかったらどうなるのか、将来なくなってしまうということで、未来のために、頑張ってたやり始めたということをしやべっていました。そういう行為は、それをしたい自分のためでもあるのです。「そうすべきだ」「やりたい」、そういう自分の思いを満たすということもあると思います。

②ボランティアにおける意味

第一に、学習と学習成果の発現、社会的な還元

です。好きなテーマを好きな場所で学び、そしてそれを生かす。博物館で、学びながらそれを生かす。第二に、自分を役立てるということです。そして、第三に、自分が役に立ったという実感を得られるということです。ありがとうございますとお礼を言われたり、分かった、この地域はそんな歴史があったんですか、きょう博物館に来てあなたに話聞いてよかったですと言われたりとか、そういう、満足感が味わえたりします。ボランティアにとっては生きている証みたいなのところがあるわけです。そしてボランティア同士、あるいはお客さんとの分かち合い、伝え合いで知識や仲間を得ることにもなる。

基本的にはボランティアの活動というのは、ただ単に自分が学ぶということだけじゃなくて、今言ったような、実質的な活動がボランティアだと思います。そして意味がある活動だと思います。ただ、プラスアルファの動機があってもいいなというふうには思います。学習だとか趣味だとか、いろいろな意味でのレクリエーションですとか、街歩きでもいいです。この博物館があるこの街が好きなんだ、博物館に來ればこの街をあちこち歩いて楽しむというのが動機としてプラスアルファであってもいいし、あるいは友達作りがあってもいいし、若者がよく言いますが、自分磨きというのでもいい。年寄りがよく言いますが、健康づくりなんてものがあるのもいいと思います。そういうプラスアルファの動機があってもいいと思います。

3 さまざまな人、団体との連携

(1) さまざまな市民との連携

市民と博物館との関わり合い方は、まず、初めは展示を見に来られます。あるいは博物館がやっている講座とか講演会、教育普及活動に参加する。あるいは博物館の出版物やグッズを買う。それで、この博物館いいな、1年に何回も来たいなとか、いろいろな情報知りたいなと思ったら「友の会」へ参加する。これ以上は、ボランティア的じゃないかというところに踏み込んでいきます。それはまず、自分が所属している家族、地域、職場、学校などの人々に博物館を紹介する、行くことを勧誘する。あの博物館で今やっている企画展

はずごくよかったよ、面白いよとか宣伝する。あるいはチラシを配る。国立科学博物館で、「あれ、何とかさんきょうどうしたの？活動日じゃないでしょ」と言ったら、後ろにたくさん人がいて、「きょうね、老人会連れて来たの。俺ね、老人会やってんの」とかということもありました。あるいは寄付や募金をしてくれたりとか、標本資料を寄贈寄託してくれたりとか、さらには博物館の展示、教育普及、広報などへボランティア活動の一環として参加してくれたりとかです。

さらに、自分が所属する団体などの博物館への協力で活動する、ということもあります。先ほどの平塚市立博物館では、博物館の講座から派生して、グループ活動で調査研究したり、写真撮ったり、集めたモノで博物館で企画展をしたりとかということがあります。例えば海辺の、海岸で拾う貝とか、相模川を調べる会だとか、市内の石碑を調べる会だとか、いろいろなものがあるようです。

(2) さまざまな団体との連携

国立科学博物館はいろいろな学会や大学と調査研究したり標本資料を貸し借りしたりして、展示に関わってもらっています。それから地元のいろいろな団体。上野の山文化ゾーン推進協議会、上野法人会にまで入っています。上野のれん会という商店会にも加盟しています。そういうところと一緒にイベントを共催したり協力したりしています。それから、企業も、もしかしたらここでもやっているかもしれませんけれども、トヨタの技術士会が「なぜなにレクチャー」という、子ども向けのいろいろな種類の工作をやっています。三菱商事は、勤労障害者の方々が、休みの土日は博物館が混んでいて見学しづらいということで土曜日の閉館後、博物館を貸し切って見学会をやる。それも三菱商事の社員がボランティアに来る、そんなことをやったりしています。

また、企業に施設を貸し出ししたり、広報に協力してもらったり、あるいはしたりとかもあります。評議会とか経営委員会とかには、大学の先生とか社長さんだとかさまざまな方に入っていて、博物館の経営をチェックし今後どうあるべきか、というのを一緒に考えてもらったりもしています。私は15年間ぐらいボランティア担当で

したが、その後6年ぐらい広報課長をやったとき、いろいろな連携が可能だということがわかりました。現在は、連携協力課という課ができています。

昨年3月まで働いていた室戸の青少年自然の家では、自然の家のイベントでサツマイモを掘ったりダイコンを引っこ抜いたりとか、あるいは定置網で捕った魚を港へ降ろすのを見にいったりとか、そんなこともしていました。

(3) 連携の目的と留意点

目的としては博物館の金も人も限られている、博物館に魅力を付け加えたい、そういうところで連携ということを考えていくのだろう。連携によって新しい発想とか可能性っていうのを開いていくのだろうと。その根底には、博物館を博物館だけで運営するのではなく、博物館の職員、予算だけでやっていくんじゃないくて、地域のいろいろな力を掘り起こして連携して行う。博物館が博物館単独であるのではなくて、地域に根差し、地域に愛され、地域に必要とされ、地域に貢献する博物館となることを目指す。地域にとって、なければならない博物館になるのだという、意識、目的が大切なのだろうと思います。連携はただ単にプラスになればいいというのではなくて、そういう視点が大切です。

留意点として、都合のいいことだけ連携するのではなくて、博物館自身が変わる覚悟を持つことが肝要です。連携するためには、向こうから、こんなこともしてよ、こういうふうにしてくれたら連携できるということもありますので、その辺は柔軟にする必要があります。連携相手も、得る物事があるように配慮する。近江商人の精神で、売り手よし買い手よし、世間よしの三方よしの精神というのがありますが、そういうことを意識する必要があります。そして博物館の味方を増やしていく。いざというときに博物館の味方になってくれるという人を増やしていく。

一方、ブランドイメージを壊してまでやるのは駄目で、ブランドイメージを高めながら、地域にとってなくてはならない、地域に根差し愛され、必要とされ、貢献する博物館になってくというのが大切なんだろうと思います。まかぬ種は生えませんが、打たぬ鐘は鳴りません。初めからあまりに

も冒険的なことは難しいでしょうけれども、小さな種を少しまいて、ちょっと様子を見ようかなということで、小さなことからチャレンジされるといいのではないかなということで、これで終わりにいたします。ありがとうございました。



講演2 「葛飾を極めるー区民との協働の軌跡ー」

葛飾区郷土と天文の博物館 学芸員 谷口 栄

地域史研究の拠点としての地域博物館とボランティア活動

みなさんこんにちは、ご紹介いただきました葛飾区郷土と天文の博物館の谷口と申します。私は勤務先で葛飾探検団と葛飾考古学クラブという2つのボランティアグループの運営を、この後に登壇する五十嵐さんと一緒に担当しています。

当館におけるボランティア活動導入に至るまでのことを詳細にお話ししますと、持ち時間の30分はすぐ経ってしまいますので、はじめにかいつまんで要点をお話ししたいと思います。それから私の話のメインとなるのは、2つあるボランティア活動のうち葛飾探検の活動を通して区民との協働の様子について紹介したいと思います。もう一つの葛飾考古学クラブの活動については、五十嵐さんが紹介してくれることになっています。

博物館のボランティアを導入し、運営するにあたって、私たちが一番困ったのは、そのノウハウを持っていなかったということにつきまます。博物館や美術館のボランティアがどのようなものかわからないまま、始動したというのが実態です。

私どもの博物館は平成3年に開館しますが、開館前から文化財セクションの啓発事業として「区民とともに遺跡調査から地域史を研究する」ことを目的に、発掘教室やそれに伴う遺物整理の体験を行っていました。博物館が開館した時も同じことを行っただけですが、参加者から「もっと継続的に考古学的な作業を博物館でしたい」という希望とともに、「対価を得る仕事としてではなく参加してみたい」という声が寄せられました。

そのような要望を地域博物館としてどう応えていくのか、開館したばかりという高揚感も手伝って、地域博物館だからこそ応えなければならないという気持ちになりました。当時の館長や博物館運営協議会の熊野正也先生にもご相談していくなかで、短期の体験型の講座形式ではなく、継続的な事業として行うには、館の学芸員と一緒に活動する博物館のボランティアとして導入してみたらどうかということになりました。



いきなりボランティアを正式に導入するのではなく、平成4年を試行期間として位置付け、ボランティアに登録してもらった方に夏期に発掘調査、その後に年度末まで出土した遺物の整理を行ってもらうなかで、進め方や課題を整理することにし、参加してくれたボランティアの方ともどのように進めて行ったら良いのか意見交換もしました。

そのような試行期間のなかで築き上げたボランティアの導入にあたって掲げたテーマは、「遺跡は専門的な研究者のためにだけ存在するのではなく、国民共有の財産である」ということです。

特に、地域史研究という調査研究の活動を博物館学芸員とともに区民（ボランティア）が行い、調査研究した成果は、展示や報告会、刊行物などとして公表する。区民とともに遺跡や考古資料から地域史研究を行う活動の拠点を地域博物館が担うという位置づけで、活動回数や内容、作業や休憩する場所、作業に使う道具類の恒久的な置き場の確保など、いろいろな課題を抱えながらも、活動の場所は博物館講堂とし、一応の調査費や消耗品費などの予算処置が整えられたので、できるところから行い徐々に改善しながら進めようということで、平成5年から正式に始動しました。

ボランティア活動を立上げてから数年は、課題が生じれば話し合っ解決していくというふうには、本当に暗中模索でやってきました。講座形式ならば「こうしてください」とお願いすれば簡単なのかも知れませんが、ボランティア活動は学術

的で専門的なことは別ですが、基本的に一緒に取り組んで知る仲間ですから、そこは丁寧に話し合っただけでいく必要があると思います。結果、みんなで決めたのだから決めたようにやろうという空気が生まれてくるわけです。

ご縁がありまして、先ほどご登壇された当時東京国立科学博物館の石川先生と出会い、博物館・美術館におけるボランティア活動の目的や理念、導入する側と参加される側の心得など、理論的な整理が叶い、たち込めていた霧が一瞬のもとに消え去ったわけです。具体的なことは先ほど石川先生が述べられているのでここでは触れませんが、なによりも今まで取り組んできた活動の方向性は誤りではないことが確認できたことは、私たちにとって大きな自信となりました。

葛飾探検団の立ち上げ

この葛飾考古学クラブの活動の中から、これからお話しいたします葛飾探検団が誕生します。葛飾という地域の博物館での考古学ボランティアという活動を進めていくなかで、休憩時間にお茶を飲みながら、また5時過ぎてから盃を傾けながら、ボランティアの方と色々とお話しをしていく中で、平成になってからどんどん街の様子が変わってしまっていて、昨日まであった建物がいつのまにか無くなってしまふ。そうするとどんな建物が建っていたのかよくわからなくなってしまうとか、街の個人商店がどんどん姿を消していくなど、平成になってからの街の移り変わりの激しさが話題となって盛り上がりました。

そして、今記録しないと、葛飾がどんな街だったのかわからなくなってしまうという危機感が共有され、街の風景だけではなく暮らしの変化という視点も交えて、街観察をしたり記録を残したり、何かやってみたらどうかということで、初めは有志で平成11年から葛飾の街を調査しようと街歩きを行うようになりました。

何年か街歩き活動を積み重ねていくなかで、このような活動をしっかりと地域博物館の調査研究活動として行っていくべきであり、ボランティア活動として位置付けて区民参加で取り組むべきではなかという話に集約されていき、平成14年から正式にボランティアという形で活動をしていま

す。名称は、遊び心も入れて「葛飾探検団」としました。この活動を通して葛飾を極めようという意気込みが込められています。

葛飾探検団の活動は、葛飾やその周辺をフィールドとしながら住宅・店舗・工場などの建物や産業、川、道、路傍の石碑を訪ねながら近代以降の葛飾の暮らしや文化の移り変わりを区民参加で調査記録することを目的としています。つまり、近・現代の葛飾の暮らしや文化というものをテーマにみんなで調査研究しようということです。

活動には大きな3つの柱がありまして、一つ目は、地域博物館としての調査研究活動を行う。二つ目は、自分たちが調査研究活動をして満足するのではなくて、成果をきちっと発表するということです。そして、3つ目として、区民参加連携事業を展開していくということです。調査研究活動や成果を基に区民参加の商品（イベント）を開発していくということです。

区民との調査研究活動

それでは、どのような調査研究活動をしているか紹介したいと思います。基本は、街歩き「葛ブラ」というものをやっています。いろんな「葛ブラ」がありますが、一つは毎年恒例にとなっている、お正月の七福神めぐりです。この切っ掛けは、葛飾柴又七福神めぐりがありますが、さらにブラシアップして魅力的な七福神めぐりにしたいという思いが団員にあって、そのためには葛飾柴又の七福神めぐりだけしていても勉強にならないということで、近隣の七福神めぐりを体験して比較し、良いところ改善点などをみんなで見つけ出そうと毎年やっています。今年は千葉の佐倉の七福神めぐりに行きました。

それ以外にも、「区境を歩く」という葛飾区の区境をみんなで歩いて、葛飾の広さ、なぜここが区界なのか、隣の区から見た風景などを話題にしながら楽しんでいます。

それ以外にも基本中の基本、区内の立石とか青砥とか各地域の街歩きもやっているわけです。必ず街歩きの時には、調査員という先導していただくボランティアの方がおります。その地域、今回の街歩きをする場所・テーマに長けた人が調査員になります。例えば、荒川沿岸を歩いたとしま

す。足立区側に堀切駅があるのですが、鉄道に造詣の深い人が調査員として先導して歩き、なぜそのようなことになったのか解説してもらおうという塩梅です。

街歩きでは団員がそれぞれの目線で街の魅力を探すわけですが、同じものを見ても十人いれば十人違う見方をするわけです。それが厄介ではなくて、楽しい・興味深いわけです。そのようなことを所々で繰り返しながら、「あーでもない、こーでもない」と葛飾の街の魅力というものを探し求めて調査をしています（写真1）。



写真1

そして、葛飾の水の記憶というものも調査しています。葛飾区は低地帯にありますので、高度経済成長期前には、用水路が網の目状に設けられ耕地に水を供給していたわけですが、高度経済成長期になって田んぼや畑が宅地化されて用水路が生活排水によってドブ化していきます。そのドブ化した用水路跡が、昭和の末に下水道が完備され今は埋められて歩道になっているわけです。その歩道は、姿を変えながらも水の記憶がすり込まれて残っているわけで、今だったら用水路があった頃のことを知っている人もいます。昔の水の記憶が残っているうちに記録しなくては、記憶が無くなってしまい、見た目そのままの単なる歩道という風景だけしか見えなくなってしまいます。

川と暮らしという関係性が葛飾区では希薄になってしまいました。葛飾区は産業ですと、川とのつながりがかつては染色業が盛んでした。大小の染色工場が中川や大きなドブ沿いにありました。

それからかつては船を使った生業の風景も見られました。中川などは蛇行が著しいので洲が多く

形成されています。洲の砂を生業とする人がいました。砂を船で運搬して商をするわけです。

染色業は違いますが、砂を扱うなど船を操って生業とする人々の多くは、河畔の水上に家を建てて生活していました。いわゆる水上生活者といわれる人々で、昭和50年代には無くなってしまい、現在ではそのような生活風景は見られませんが、今でも川面に木柱列などが顔を覗かせるなど建物の痕跡が認められます。

水の調査の一環として、この水上生活の跡を記録するというも行いました。実は、この調査の切っ掛けは、中川を管理している東京都が堤防の改修を行うため、水上生活跡の残る河畔が浚渫されることになり、姿を消してしまうことが分かったからです。何とか現状を写真だけではなくて、図面なども取って記録しようということになったわけです。

葛飾区近・現代遺産リスト

それから、葛飾探検団選定の近・現代遺産リストの作成ということもやっています。気持ち的には葛飾区の歴史的・観光的資源として残したいのですが、権限が無いものですから、せめてリスト化して葛飾探検団おススメの街歩きスポットとして、街歩きの一つの資源にしていこうということでやっています。

例えば、昭和そのままの駄菓子屋さんが小菅にあります。映画「20世紀少年」にも使われたお店ですが、こういう昔ながらの駄菓子屋さんもまだ健在なわけです（写真2）。こういうものをただ残っていますよというだけではなく、みんなで地域資源として共有していこうということです。



写真2

まだ街のいたるところにベニヤ仕立てのドアのある昔のモルタルの2階建てアパートが残っています。物干し台もまだ見かけることがあります。物干し台などは都市的な空間の利用として、都市的な場の風景を代表するものだと思います。このような何気ない、葛飾のどこでも見られた風景ですが、実はこれらがどんどん姿を消しているわけです。その代表的なものを写真撮影し、地図上に落としとしてリスト化しています。

それから、葛飾区は大正頃まで煉瓦が作られていましたので、葛飾産の煉瓦で造った倉庫もまだまだ残っています。こういうものも私たちがきちんと認識してリスト化して共有していかないと、いつのまにか消えていくのではないかと危機感もっています。

煉瓦倉庫の残る金町の三菱製紙工場の跡地には、地球窯といって紙を再生するときの蒸し窯が、ここの再開発のモニュメントとして残っています。この三菱製紙工場が築かれた場所は、葛飾にとって近代工業の発祥の地でもありますので、葛飾の産業史を語る上でも大切なモニュメントがあることが「場所」の記憶を何とかつなぎとめてくれているわけです。

京成高砂駅の駅舎には、1911年の敷設当時のレールのモニュメントが展示されています。京成電鉄はいいことをしてくれたなと感謝しています。これを葛飾区の近・現代遺産としてもきちんと認知し、後世へ伝えていきたいと思います。先ほど紹介した小菅の駄菓子屋さんの近くに、今では姿を消した木の電信柱が、上は切られています。これは珍しいと写真におさめたのですが、残念ながらこれは去年行ったら無くなっていました。大切なのは、普段見ている何気ない風景が実は面白いぞと、また重要なのではないかと、それをみんなで街を訪ね歩いて見ていくと、いろんなものが見つかります。それをその時だけの一過的な楽しみとせず、街の魅力として記録しなくては、街歩き（調査）をした意味がないわけです。その街歩きのつれづれを近・現代遺産リストとして体系化して記録できたらと思っています。

葛飾の夜の名物を記録する

昨今、立石が「もつ焼きの聖地」として注目されています。いろんなもつ焼き屋さんがありますが、それも近・現代遺産として考えた方がいいなと思っています。これには多分に個人的な好みとも重なり、結構調査費を注ぎ込んでおります。

葛飾の、いや隅田川以東ではもつ焼の肉は牛ではありません、豚です。そして、もつ焼きの相方はハイボールで、このセット関係を文化的に扱えば地域的な飲食文化としてとらえることができます。詳しくは、『東京人 葛飾区を楽しむ本』（2012）でご確認いただきたいと思います。

ここでは触りだけ、つまり葛飾の夜の名物はもつ焼とハイボール。みなさんハイボールは知っていますか。隅田川以東の京成沿線ではハイボールといえば焼酎ハイボール、決してウイスキーの炭酸割ではありません（これが本来なのですが）。この焼酎ハイボールのつぎ方が凄いです。何が凄いかといいますと店の人は計量カップを使わず目分量だけで焼酎を注ぎます。その焼酎を注いだグラスと炭酸を客に出すわけです。グラスに炭酸を入れると、ちょうどグラスの縁際ギリギリで炭酸を注ぎ終えます。この的確な分量配分は、無形文化財だと思っています。職人さんのこういう技というのも葛飾区の近・現代文化遺産としてきちんと継承できたらいいなと感じています。

調査研究活動のまとめ方

それでは話題をかえて、それら調査研究活動の成果をどのように発表しているのかということをお話ししたいと思います。

年度末に活動成果報告会を開催しています。探検団の一年を通しての活動報告とともに、団員が自分で調べたことを団員だけでなく、一般区民に対して報告する情報発信の場でもあります。

活動報告会以外に冊子にまとめたりもしています。平成16年頃から変わりゆく葛飾の風景を写真から確認しようということで、葛探写真館「かつしか昭和の風景」という写真展を開催しています。山口敏郎さんという団員の中に写真の好きな方がいまして、その写真が大変素晴らしい出来で、街歩きの時などに昔の風景の資料として、団員に見せてくれました。そういう貴重な写真を団

員だけで見ているのはもったいないということで、博物館で展示会をしようと始めたものです。好評で問い合わせが多く、山口さんお写真を写真集として刊行することにもなりました（写真3）。

山口さんの撮られた写真を展示した写真展が契機となって、毎年葛飾区の昭和を物語る街や家族



写真3

の写真を展示しているのですが、団員が自分で持っている写真だけでなく、自分たちの知り合いに声をかけて写真を集めて写真パネルにします。展示も自分たちで掲示するなど手作りで行き、団員自らお客さんに解説をしたりしています。

最近、出版社から葛飾区の昭和の写真集を刊行したいという依頼がありました。葛飾探検団として受けてやってみたらどうかと探検団の幹事にお話ししたら、是非やってみようということになり、みんなで手分けして写真集をまとめました。活動の良い記念になったと思います。

それから、『可豆思賀』という葛飾探検団の冊子を作っています。『可豆思賀』は、活動の記録や団員の研究成果の発表の場となっているもので、現在5号まで刊行されています。現在6号の編集で3月末まで納品されます。今日がその校了日なので、この後に報告する五十嵐さんと出版が来るまで最終チェックをしていたところです。

葛飾探検団は、写真展のほか、博物館の特別展も担当し、図録を作成したりもしています。特別展は、活動成果の発表の場でもあります。展示の準備をしていて、みんなで話し合っています。

いろいろなアイデアが出てくるんです。例えば、僕がアイデアを出したとしても、谷口が言うことも面白いが、こうしたらどうか、またそれはこうすればもっと良いのではないかとか、話をしていくわけです。さすがだなと思うことしきりで、そのようなやりとりが楽しいのです。

そうした時に出来たのが、特別展「かつしか街歩きアーカイブス」での匂いの展示です（写真4）。



写真4

匂いの展示とは何かといいますと、もつ焼きの匂いです。もつ焼き屋さんに行かなくてもここで、展示会場でもつ焼き屋さんタレの匂いの違いを感じていただきたい。それ以外にも葛飾には名物がありますので、うなぎ屋の蒲焼きの匂いもやりました。この匂いの展示はけっこう受けまして、これもボランティアさんといろんな話をしていく中で、遊びと言えば遊びかもしれませんが、展示の深みといいますと広がりが実現できたのかなと思います（写真5）。



写真5

区民との共同から協働へ

このように葛飾探検団は、博物館を拠点として、葛飾やその周辺をフィールドとした区民との協働によって調査研究し、その成果を公表していくわけですが、それだけではなく調査研究成果を基に葛飾の歴史的・文化的資源を活かした団員でない一般区民が参加できる事業をやったらどうかというふうにつながっていくわけです。

そうしたときに葛飾区の柴又山本亭に戦時中に使われた防空壕が残っていますが、その調査を葛飾探検団が行い記録を残していく中で、こういう戦争関連の遺跡、遺構が残っていることを多くの人に知ってもらうことが大切ではないかという団員の共通認識のもと、イデオロギー云々ではなく、戦争を風化させず、平和を考えることにこの防空壕を活用できるのではないかという団員の思いへ集約されていきます。

そうして企画したのが「東京大空襲と葛飾」というイベントです。防空壕は普段公開されていないので葛飾探検団が案内役となり、葛飾柴又寅さん記念館と共同で、毎年1回3月10日の東京大空襲の近くの週末に公開事業として開催しています。団員のなかに、は東京大空襲を経験された方もいらっしゃいます。そういう実体験した人が当時の様子を語ってくれます。こういうのもボランティアならではのことではないかと思えます（写真6）。



写真6

「銭湯ウォーク」という先ほど紹介した街歩きプラス銭湯を加えた区民参加のイベントも行っていきます。これは葛飾区の商工振興課と葛飾浴場組合連合会と共同で行っているものです。

なぜ、これを行うようになったかと言いますと、

葛飾区内の銭湯が激減しています。葛飾区には昭和57年には150軒くらいあったのですが、今は40軒を切っています。そういう厳しい状況の中で、銭湯も葛飾の重要な歴史的・文化的資源であり、銭湯の魅力は葛飾の魅力を構成する要素であるという認識から銭湯を宣伝しようとやっています。

そもそも先ほども話題に出しました「かつしか街歩きアーカイブス」の特別展に伴う調査で、銭湯の図面を取ったり、写真を撮らせてもらったりしていました。銭湯が取り壊されるところにもボランティアが行って、写真だけでなく、タイルとかもサンプル採取してきてくれたこともあります。銭湯が廃業して取り壊されると、単に銭湯がなくなるという単純な問題ではなく、街の景観や地域にとってどのような影響があるのかなど、みんなで考えたりもしています。ただ銭湯が無くなるって単純な問題じゃないんだということをみんなで議論しました。

そのような銭湯に対する取り組みと、商工振興課と葛飾浴場組合連合会の銭湯をもっと知ってもらい入ってもらおうという取り組みとがうまく出会って、「銭湯ウォーク」という商品が共同で開発されたわけです。

葛飾を極めるアーカイブ

このような活動を1年間行っています。今は80人くらいの方がボランティア登録しているので、会員同士の情報共有できるようにフリーペーパーとして「葛探通信」を作ったりしています。

最後にお話ししておきたいのは、葛飾を極めるということです。時間も時間ですので、その一端を紹介します。

先ほどから話題に出している平成21年に開催した「かつしか街歩きアーカイブス」という特別展ですが、好評につき平成26年にもPART2を開催しています。

平成15年の時に、昔ながらのたばこ屋さんがありました。平成21年にはもうやめているんです。平成21年の時には他の店も含め街の風景は、5年くらい経つとこんなに変わってしまうということばかりでした。その時に記録していないと、もう商売の様子がわからなくなってしまうと

いうことです。

街の、店の定点観測的なことも必要だとみんなで認識しているところです。飲食業もどんどん変わっていますよね。チェーン店が多くなっていますが、普通の昔ながらの蕎麦屋さんだってちゃんと記録しておかないといつの間にか姿を消してしまいます。

井を乗せる台がどれだけ種類があるのか知っていますか。出前でも、井の木の蓋も今は使われなくなり、サランラップで代用していますよね。なぜ木の蓋を使わなくなったのですかと店の方に聞いたら、漆の職人さんがいなくなってしまったから、メンテナンスが出来なくなったからだそうです。

いろいろ商いの聞き取り調査をしていくと、その商売の別の部分が見えてきます。私はもともと考古学の人間なので図面を取るのが好きなんです。店の立面図とか平面図で記録を残していますが、私たちが調査した蕎麦屋さんには去年店を閉めました。いい時に調査をさせてもらったなと思っています。

葛飾区には、昔ながらの味噌専門のお店も残っています。醤油も昔は造っていたそうです。味噌を盛るしゃもじ、秤、かつて使った醤油の入った樽の注ぎ口の穴を開けるときの錐など、店には道具類が、当たり前ですが自己主張せず何気なくあります。その当たり前の店の姿を記録するために図面を取ります（写真7）。この味噌屋さんも

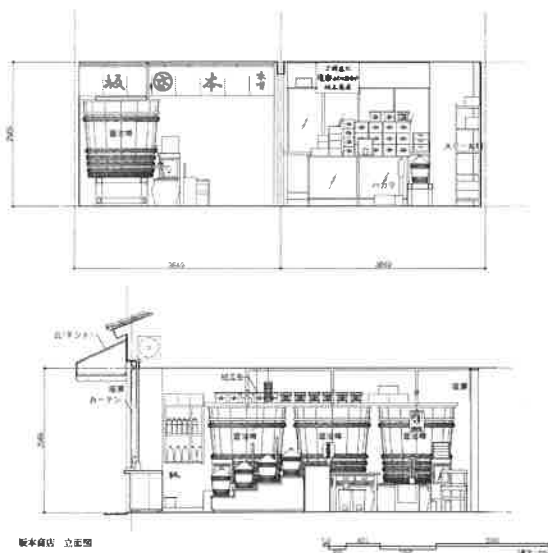


写真7

今後道路の拡幅工事がありまして、もしかしたら

今年あたり無くなってしまいかもしれません。調査をしていて面白かったのは、商品のお味噌を盛りつけますよね。盛ってきれいにしただけではだめなのです。わざときれいに盛った頭の部分を削るのです。何故でしょうか。店の人が言うには、おまじないです。盛ったままの綺麗な形だとお客さんが買っていないということになり、少し削ってあるとすでに先客が買っていったということなのだそうです。つまり売れ筋だということです。こういうのを発見して僕は喜んでいます。

最後にアーカイブの極みは、調査した時のそのお店の様子を記録する時に、駄菓子屋さんやたばこ屋さんで売っているものは何だったのかということも記録するために、調査した日に売っている商品を一つずつ買っています。買って全部値段も記録しました。そうして初めて調査した時の写真や図面が活きるのではないのでしょうか。アーカイブという面では、ここまでやっておくと、後から復元することができるのかなと思っています。葛飾を極めるための手法の一端を紹介しました。

学芸員が専門的に調査研究をすることはあたり前のことであり、専門職としての責務でしょう。それもよいのですが、地域の方々と一緒に調査研究を行い、記録化したり資料を収集したり、その成果を公表することは、地域博物館だからこその活動であり、地域博物館の学芸員として地域の方と協働することは博物館の魅力を高め、さらに博物館の社会的役割を多くの方に知っていただく良い機会にもなると持っています。

博物館のボランティアというと展示解説とかが多いわけですが、調査研究、資料の収集保管、展示、教育普及に至る博物館活動全般にわたりボランティアさんが一緒に活動しているのが葛飾考古学クラブも含め、他館との違いなんだと思います。

どうもありがとうございました。

講演3 「博物館ボランティアのすすめ—葛飾区郷土と天文の博物館における実践を通して—」

葛飾区郷土と天文の博物館 専門調査員 五十嵐 聡江

はじめに

みなさん、こんにちは。葛飾区郷土と天文の博物館で専門調査員をしております五十嵐です。今回はこのような機会をいただきありがとうございます。私は今ご紹介いただいたように平成16年から2年間、当館のボランティアに所属し、18年から職員としてボランティア活動を担当しています。

はじめに、私が当館でボランティア活動を始めたきっかけですが、大学で4年間考古学を学んだ後、遺跡や遺物といった考古資料をどうやったら市民と一緒に活用できるのかということを勉強しようと思った時に、ある人から当館を紹介され、谷口さんに直接電話をかけたことでした。最初からボランティア活動に参加したいと言った訳ではなく、当時ボランティア活動がすでに10年は超えていたので「ボランティア活動を継続するためにはどういった秘訣があるのですか」ということを、たしか尋ねたのだと思います。そこで谷口さんから「だったら、ボランティアをやりなよ」と声を掛けていただき、それでボランティア活動に参加するようになりました。そういったきっかけで私は始めているので、先ほど谷口さんの葛飾探検団における葛飾愛あふれるお話を聞いていただきましたが、私の方はボランティア活動をちょっと引いた目と言いますか、考古学とか博物館の資料に対してボランティアの皆さんがどのように関わっているのか、具体的にご紹介できればと思っています。

当館のボランティア活動について次の3点をご紹介します。まず1点目として、当館のボランティア活動は、先ほど谷口さんからお話しがあったように「調査研究」を中心に行っているということです。ボランティア活動として調査をどのように行っているのかご紹介したいと思います。そして博物館が実施する調査研究活動は、調査研究をして終わりではなくて、それを必ず広く公表することが求められます。ボランティア活動で行っ



た調査研究活動も同様であり、ボランティア活動の中には調査研究活動に加え成果を公表する活動があります。この成果を公表する活動を次に紹介します。そして最後に、ボランティア活動を通じてボランティアさんが地域とどのように関わっているのか、また25年続いてきた活動の秘訣は何かということをお話しできればと思います。

博物館の調査研究活動とボランティア活動

まず、ボランティア活動と調査研究活動、それと一緒にいうというのが当館の大きな特徴になります。私が10年前に谷口さんに最初にお会いした時に、「ボランティア活動を業務の何割くらい割いていますか」という質問をしたのですが、「8割」とお答えいただいたのがすごく記憶にあります。この8割という数字、ボランティア活動以外にいろいろな業務があるのに8割割くというのはどういうことなのだろうと、その当時は理解できませんでした。ボランティアとして参加している時にもわからなくて、勤めてみて初めてわかりました。それはどういうことかと申しますと、ボランティア活動を他の博物館業務と切り離して、例えば、展示の解説を調査研究活動と切り離してその部分だけをボランティア活動としてお願いするという形では、皆様もご承知の通り業務の8割にはなりません。8割をやるためには、業務の中を切り離すのではなく、基本的に博物館業務のすべてはボランティア活動がベースに行われている

と考えていただくとわかり易いかと思います。

それを具体的にどうやっているのかと言いますと、考古学ボランティアを例にあげると、こちらのボランティアは発掘調査、これを当館では学術調査と呼んでいますが、まずこの発掘調査を年に1度行います。発掘調査をボランティア自らが引き、掘ることはもちろん、記録することも自分たちでやります。よく考古学ボランティアは発掘だけ行くとイメージを強く持たれがちですが、実際は発掘して終わりではありません。発掘調査で出土した資料は博物館に持ち帰って、1点1点土器を洗うことから始めて、番号を付ける注記作業といった活動も行っています。そうやって整理作業をして最終的には報告書を刊行し、その成果を年度末に展示や遺跡報告会を開催し公表しています。展示では、今年度調査した遺跡の成果を出土遺物とパネルで解説し、あわせて一年間の活動の様子も写真パネル等で報告しています。遺跡報告会では、ボランティアさんに調査成果を約30分程度発表していただいています。発表のストーリーもボランティアさん自身が考えて、その中で私も谷口さんも入って作り上げていくという体制でやっています。こういった形で調査を基盤として、諸々のボランティア活動が行われています。

同様に、葛飾探検団でも調査を活動の基本にしています。これは先ほど谷口さんから詳しく説明いただいたように、この調査のことを「葛ブラ」と呼び、みんなで葛飾区内を名所や文化財に捉われず縦横無尽にひたすら歩きます。そしてただ歩いて終わりではなく、「葛ブラ」の最後に必ず近くの集会所を借りて、その日歩いた地域の魅力や価値をみんなで共有し深めることをしています。ここで交わされる参加者の意見や情報が、例えば「次、どこに注目して歩こうか」など次の活動を定める材料になったり、さらに蓄積されると「街歩きアーカイブス」のような展示へと繋がっていく貴重な場です。

例えば近年行った「区境を歩く」というテーマの「葛ブラ」では、葛飾区境の約40kmを7回かけて歩きました。実際に全部歩いたのは70名ほどいるボランティアさんの中でもただお一人です。私も谷口さんも実は全部踏破できなかったのですが、こういった形で歩きながら調査をして、その

成果はパネル展示や、報告会での発表、「葛探通信」という広報誌での紹介、さらには博物館の刊行物『可豆思賀』に記録し公表しています。

調査研究活動から広がるボランティア活動

このように当館では、調査活動を軸にボランティア活動を行っている訳ですが、繰り返しのようになりますが、活動は調査して終わりではありません。調査を行った者の責任として、様々な形で成果を発信する必要があります。そこで、ボランティアさんから広く区民の皆さんに成果を伝えるといった活動が調査の次に出てきます。すでにその一部はご紹介しましたが、ここではそれ以外の活動をいくつかご紹介します。

まず、発掘調査の時には調査と並行しながら小中学生を対象とした発掘教室を開催しています。調査期間は約2週間くらいですが、そのうち2日間を発掘教室に充てて子どもたちに参加してもらっています。この事業では、ボランティアさんが、子どもたちをサポートしながら一緒に掘っていくのですが、まずは子どもたちの安全確保を徹底します。そして発掘のサポート、発掘教室も遺跡調査でもあるので、遺跡を理解しているボランティアさんがサポートをしながら、かつ子供たちが気持ちよく楽しく発掘してもらうために、「こっち掘った方がいいよ」「こっちの方が土器が出るんじゃない？」などと子どもたちを誘導しながら発掘教室を行っています。また、調査が終盤に近付くと、子どもだけでなく近隣の皆様にも発掘調査の様子を知っていただくために現地説明会を開催しています。事前に職員とボランティアさんが一緒に調査状況を確認し、見学者への説明は書く調査区ごとにボランティアさんが中心になって行っています。

発掘調査期間中は約2週間なので、調査成果を発信する活動は3回ほどになってしまっていますが、発掘調査を終えた後も成果の発信を行っています。具体的には、今まで調査した場所が、東京都の史跡や有形文化財などの指定を受け、東京都の文化財公開事業「文化財ウィーク」の実施があります。これは年に1回、文化の日前後に、指定されている文化財の公開をしましょうという事業で、当館ではボランティア活動として、ボランティア

さんが自ら調査した遺跡を案内するということを行っています。例えば、柴又に寅さん墳輪で有名になった柴又八幡神社古墳という前方後円墳があるのですが、こちらは考古学ボランティアの皆さんが調査を実施し、その出土資料が平成23年度に有形文化財に登録されたことから、翌年より文化財ウィークで一般の皆様をご案内しています。今年度（平成29年度）は、昨年度に柴又帝釈天の瑞龍の松やお庭の遼溪園が東京都の天然記念物と名勝に指定されたので、帝釈天もコースに加え、柴又八幡神社古墳を考古学ボランティアが、帝釈天を葛飾探検団がそれぞれ案内することで、「柴又地域」を総合的に案内する事業に発展しつつあります。

このような現地における遺跡の公開や成果の発信活動に加え、博物館内では5月5日と11月3日に博物館祭りを開催し、子どもたちに地域の歴史文化に親しんでもらって、好きになってもらおうと、未就学児でも体験できるお面づくりや、大人もはまる拓本教室、常設展を見ながら答えるクイズなどを開催しています。お面作りや拓本教室の指導、サポートやクイズの出題から解説まで全てボランティアの皆さんが行っています。クイズの問題も満遍なく展示室を回ってもらうにはどの問題が良いのだろうかというワーキンググループを作って皆で考えました。問題の中には、この遺跡知ってもらいたいけれど、実はその遺跡に関する資料が展示されていない場合には、「この写真を見てもえれば問題に答えられるよ」と展示室内でボランティアさん自らが遺跡の写真を見せたりしています。そこで「昔の葛飾はこうだったんだよ」とか、「この間あそこを掘ったよ」などと子どもたちと交流することで、少しでも葛飾の歴史に興味を持ってもらえるように努めています。

館内での普及活動は博物館祭りが主ですが、館外では区内の小学校を対象に、歴史の授業の一環で古代体験を実施したり、図工の授業で伝統産業の今戸焼づくりを行う際に、ボランティアさんにサポートをしていただいています。こういった形で館外の出前授業にも参加していただいて、私と谷口さんだけではなく、ボランティアさんが間に入って、子供たちと向かい合いながら、一緒にやっていく感じですよ。

これまで考古学ボランティアを中心にお話してきましたが、葛飾探検団の方でも防空壕の調査をきっかけに、その調査成果と葛飾の戦争を考えていただく機会にさせていただこうと「東京大空襲と葛飾」という事業を行っています。事業では団員が防空壕を案内するのですが、団員の中には東京大空襲の体験者がいらっしゃいます。例えばこの方は最近お年を召してなかなか活動には来れなくなってしまったのですが、南千住で東京大空襲を受けていまして、話をする時には防空壕の中での体験、どうやって逃げたのか、確か弟さんと逃げたとお話を伺っているのですが、このような貴重な体験談を直接防空壕の中で話していただいています。

他にも葛飾の昭和の風景と言った手作りの写真展を開催しています。これは自分たちで写真を集めてきて、どのようにレイアウトをするか、どう照明を点けるかというのも自分たちで行います。今年（平成29年度）で10回目を迎えるのですが、写真展を続ける中で、「その写真の場所が今どうなっているだろうか？それを展示した方がいいのではないか」、「葛飾はどんどん風景が変わっているんで、その変化をちょっと展示してみよう」と団員自らがかつて撮影された場所を探し、写真を撮って、展示することも昨年（平成28年度）より行っています。展示を行うとともに、移り変わる葛飾の風景の調査も同時に行っているということになります。

こうやって今見ていただいたボランティア活動が、実は業務の大半を占めています。谷口さんも私もボランティアさんと一緒に発掘調査もするし、「葛ブラ」もするしということを行っています。もちろん谷口さんも私も別の調査研究もしていますが、基本的にこの葛飾の博物館で行う調査は当然ボランティアさんと一緒にやって、その成果を還元していくという活動をベースとしてやっています。これ以外に全くボランティアさんが絡まない業務はあるだろうかと思ったのですが、谷口さんが講座をいくつか持っているくらいで、基本的にはこれがベースになって我々が担当する博物館の考古分野の事業が回っているという感じになります。

自分たちの歴史は自分たちの手で

「博物館が結ぶヒトとマチ」のお話を頂いたときに、私は当館の場合はむしろ「ボランティアが結ぶ博物館と地域」だなと思いました。それは、もちろん私たちがボランティアさん以外の区民の方に接することもあります。業務の大半を見ていくと、そこにボランティアさんが必ずワンクッション入っているのです。これまでお話してきた「発掘教室」や「文化財ウィーク」、また小学校での古代体験授業の際も、もちろん職員である谷口さんや私も話をしますが、実際に火おこしを体験したり、土器を作ろうという時には、ボランティアさんが間に入って子どもたちに丁寧に教えたり、指導していただいています。そういったところでボランティアさんが私たち（博物館）と区民の皆さん（地域）との間に入って下さっていると、活動を通して言えると思います。

それともう一つ、ボランティアさんのお蔭で出来る、つまりボランティアさんに人生のスキルがあるからこそ様々な活動が展開できていると言えます。ボランティアさんと接していて一番思うのは、一番スキルが無いのは私なのです。ボランティアさんのいろいろなスキルがあるから、活動が出来ているなというも思います。例えば、ボランティアさんの中で外国語に堪能な方が何人かいらっしゃって、英語の教師だったという方も2、3名いたり、通訳をやっている方もいます。そういう方が中心となって、柴又八幡神社古墳や葛西城など区内で有名な遺跡を英語で解説した資料を制作しました。英訳から資料のレイアウトまでボランティアさんの手によるものです。この資料は博物館で手刷りしたのですが、今では博物館の刊行物の中にも英文をつけるようになりました。それから皆さんのお手元にある冊子『考古学ボランティアのすすめ』ですが、これはボランティアの皆さんが編集まですべて行い制作したものです。考古学ボランティアは今年（平成29年）で活動25周年を迎えるのですが、これまで活動が続いてきた秘訣を記録し、後進のボランティアの参加者に役立ててもらおうとともに、ボランティア活動の導入を考えている他館の参考になればと企画したものです。どのような本にしていこうか、何を伝えていこうか、というところから打ち合わせを

し、最後は校正まで一緒にやってきました。さらに、先ほどの報告会のプレゼンもパソコンのスキルに長けている方が中心になって準備をしています。

また、活動を続けていくには参加者の情報共有が必須ですが、それもボランティアさんが中心となって行っています。ボランティアさんの人数は、今年は考古学ボランティアが81名、葛飾探検団が68名で、毎年だいたい70名から80名くらいで推移していますが、実際に活動に参加されている方は、考古学ボランティアでは20名前後になります。残りの60名の方は、諸般の事情で1ヶ月に1回や半年に1回、中には登録していても1回も参加できない方もいらっしゃいます。そういう方に向けて、日々の活動の内容を案内する会報「考古学クラブだより」を作っています。A4サイズで多くて8ページ前後のものを毎回、2ヶ月に1回程度出していますが、これもボランティアの皆さんが自分たちで編集をしています。

このように振り返ってみると、博物館が何もしていないようにみられるかもしれませんが、どちらかと言うと私は、ボランティアさんが動きやすく活動しやすく、先ほど石川先生の方でありましたが、館のブランドを崩さない、落とさない、高めることを頭に入れながら、ボランティアさんがいかに活動しやすくできるか、そのことを常に意識しながら動いてきたなと思います。

最後に当館のボランティア活動が続いてきた秘訣は、「自分たちの歴史は自分たちの手で」というボランティアさんの言葉に尽きると思います。この言葉は『考古学ボランティアのすすめ』を作っているときにボランティアさんから「私たちはこれでやっているのだから、活動にも責任を持つし、自分たちが良ければいいというのではなくて、それを次に引き継いでいきたいという思いで活動している」と教えていただいたものです。このボランティアさんの思い、こういう意識になったという上からで申し訳ないのですが、そういう気持ちで参加して下さるようになってるのが非常に嬉しいですし、この思いがあるからこそ続けることができたのだと思います。そしてこの思いがどのように醸成されたのか常々考えてきたのですが、活動の根幹にある「調査研究」という

もの、なかなかボランティアで調査するなんてという声もあつたりしますが、そういう中で実際に自分の手で歴史にふれる体験を通して「自分たちの歴史は自分たちの手で」という遺跡が育まれてきたのだと思います。そしてそれを軸に活動をしてきたお蔭で、逆にボランティアさんが、私たちというか博物館を支えて下さっているのだと思います。

この「自分たちの歴史は自分たちの手で」というのは葛飾探検団にも共通しています。地域のごとは自分で調べようということで、戦争碑というのを皆で悉皆調査をし、調査成果は葛飾探検団の活動報告書『可豆思賀』5に掲載しました。これも戦争碑などの戦争に関する資料をちゃんとやっていかなければいけないとボランティアさんが中心になって主導していただいたお蔭で出来たものです。

現在も、小菅の拘置所のあるところで製造されていた煉瓦を考古学ボランティアで調査しています。当館に寄贈し煉瓦を皆で整理し記録しながら、小菅からどこに供給されていたのかボランティアさんと一緒に調べています。ゆくゆくは報告書にしようを目指しています。先日も青山学院の建物の基礎に小菅の煉瓦が使われていたことをボランティアさんが見つけて教えてくれたのを、皆で見に行きました。このように今でも「自分たちの歴史は自分たちの手で」の思いを忘れず皆でやっていくという形で、来年度で25年を迎えるという感じになります。

本当は課題もいろいろあって、お話しをしたかったのですが、まず、こういった状況でやっていると見ていただいて、後ほどご質問などあれば、その時にお答えできればと思っています。それでは今日は本当にありがとうございました。

質 疑 ・ 討 議

パネラー 石川 昇・谷口 栄・五十嵐聡江

司 会 手塚 雄太

1 事前研修とボランティア同士の関係について

司会：どなたかご質問いかがでしょうか。はい、じゃどうぞ、お願いします。

渋谷：現代産業科学館の渋谷と申します。きょうはありがとうございます。

五十嵐先生には、いろんな活動をご紹介いただきまして、非常に参考になりました。で、たとえば、新人さんがいらしたときに、たぶんいろんな事前研修ですとか何かされているのかと思ひまして、どういったことを主にされているのか（聞こえず）。あと、もうひとつございまして、ボランティアさん同士の横のつながりといいますか、たとえばどこか行かれるときに、班長さんですとか何かリーダー的な人がいて、キャリアに応じて何か指導している、ボランティアさん同士で育て合うというか、何かそういうようなかたちであるのかな。その二点、よろしく願いいたします。



五十嵐：ご質問ありがとうございました。説明不足ですみません。まず研修についてですが、先ほどの説明では、いきなり発掘調査から始めるとお話ししてしまったのですが、実際はまず毎年3月に、ボランティア活動に参加していただける方を募集します。これは継続参加または新規に関わらず、一年に一度、「登録カード」というものを提出していただき、活動へ参加する意思を表示していただきます。葛飾探検団の場合は、「登録カード」の提出を持って登録というかたちになります。一方、考古学ボランティアの場合は、これは

以前ボランティアさんの方からそういう話が出たと伺っていますが、初めて入った方が地域の歴史を知らなかったり、考古学がどういう学問であるかわからなかったり、または資料の取扱い方ですね、先ほどの写真で資料を子どもに見せたりしていましたが、そういうことを知らずに参加されるのが、ボランティアさん自身が「それじゃあつらいよ」ということになったそうです。また、新人さんとベテランの方との間に開きが出てしまうこともやっぱり良くないので、4月から1ヶ月間、毎週日曜日の午前・午後2時間ずつ計20時間程の講習会を行っています。内容は、一つは葛飾の歴史を、旧石器時代から現代までを含めて、葛飾の資料等を用いながら知っていただくというのを5回。加えて3回というのが、外部から先生をお招きして、その時々ボランティアさんの関心や、現代社会と考古学がどう関わっているのか、そういった問題などについて3回講座をしています。今年度は、「文化遺産と考古学」ということで、考古学は文化遺産のうちの一つですが、そういうものが社会とどのように関わっているのか、また考古学でわかった、調査された遺跡等が、今どのように整備されたり、そこにはどんな問題があるのか、そういったことを勉強する機会を設けています。それに加えて、これはボランティアさんだけの研修会というかたちで、考古学研究法というものを2回やっています。そこでは考古学がどういう学問なのか、資料の取扱いも含めて、また本日ここでお話ししたようなボランティア活動のことも含めて話します。それらの講座を受けていただいたあと正式に登録ということになり、5月半ばから活動します。葛飾ではそのような手順でやっています。また、活動の中では、お互いにコミュニケーションをとりながらそれぞれのスキルに応じて作業を分担しながら活動しています。

博物館でボランティア活動をやると、当然いろんな考えの方が入って来られます。そこで、毎年必ず登録が決まった後ですね、活動が始まる時

に必ず一回、石川先生の本日聴いていただいた話を2時間分お願いして、博物館のボランティアっていうのはこういうふうに活動しているんですよ、こういう目的をもってやっているんですよということを、みんなで共通に知って、そこからスタートするというのでやっています。

谷口：ボランティア同士のことは、ボランティアさんに任せています。あまり介入はしません。それと大切だと思うのは、私たちがボランティアさんと接するとき、必ずやってはいけないのは、昔の職業とかを聞いてはいけないということ。いろんな職業の方や役職の方もおられると思うのですが、それはそれ、そのようなことは関係なしに博物館のボランティアを登録されたわけですので、そのことは聞かないようにしています。

逆に自分から「私はこういうことをやっていた」と自慢げに言う人は、だいたい辞めていきますね。昔のお仕事は今の活動には直接関係ないわけで、ボランティアさん同士の、阿吽のなんて言いますか、マナーっていうか、そういうものがあるのです。活動していく中でどのようなお仕事していたかは自然と知れていくものです。すみません、答えになっていないかもしれませんが。

石川：それじゃ、私も付随して。葛飾のボランティアの養成講座に招かれて話をするとき、博物館のボランティアとしての心構えっていうのを話します。そのときに、今、谷口さんが言ったみたいなことを、別な言い方で言うんですけども、それはどういう言い方かという、みなさんは博物館ボランティアになるということで、平等に扱います。出家したみたいなもんです。ここからみんな、専門的知識があるかもしれない人、もしかしたら校長先生もいるかもしれない、大学の先生もいるかもしれない、社長さんもいるかもしれないけど、みんな平等です。そして、みんなスタートは同じです。ここから始めます、と。で、これからだんだん、徐々に徐々に「あ、この人は何かについての知識がすごいんだ」とか、「この人はコミュニケーション能力があるんだな」とか、「この人は、人と人とをやわらげるのがうまいんだな」とかっていうのはわかってきますので、それは、徐々に発揮してってください。まずは出家したと思って始めましょうね、というこ

とを研修で必ず言うようにしています。以上です。

司会：よろしいでしょうか。

渋谷：ありがとうございました。

司会：たいへん印象深い、ボランティアになるということは出家したようなもの（笑い）、という印象深いお話しがありましたが、他に何かご質問ありますでしょうか。先程、五十嵐さんの方からは、話せなかった課題もいろいろあるんだというようなこともありましたけれども、何かあればお願いします。

2 ボランティアの出身地など、ボランティア制度の課題

北澤：流山市立博物館の北澤です。お三方にまとめて伺います。葛飾の活動は、本当に長く継続されて素晴らしいと思うんですけども。ボランティアに参加されている方々、特に葛飾は、多分寅さんと一緒に「生まれも育ちも葛飾柴又」とか、そういう方々が多いような気もするんですけども、そういった方々がメインで、人が少しずつ入れ替わり活動しているのかなというイメージがあるんですが、そういう構成はどうなっているのか。特に流山市の場合は、私が講座をやったとき、「50年前住んでいた方いますか」、と聞いても、まず、ひとりもないんですね。多分葛飾は、下町でずっと生まれ育った方々が、結構熱くやれているのかな、というイメージがあるんですけども、その辺を教えていただきたい。それと、25年たってその活動の中でやっぱり課題が出てくると思うので、その辺をお聞かせいただきたい。

それと石川先生、やはり土佐の方だと高知で活動されているボランティアの市民活動の方々っていうのは、やはりほとんどが高知出身の方々で、特にあの辺は人が減って行く中でまちを盛り上げようだとか、そういった中で博物館だとかそういったものと一緒に取組んでる姿っていうのを聞いたりしているので、その辺もお話しただけならと思います。

谷口：葛飾のボランティアの方の出身地の構成は、6割か7割くらいが地元の人で、それ以外は他地域の人です。生粋の葛飾って人は少ないので



はないでしょうか。先ほど北澤さんが触れたように、葛飾でも高度経済成長期以降に葛飾に移って来た人が多いですね。

五十嵐：特に男性の方に多分多いと思うのですが、葛飾出身ではなくて、でも家を買ったのが葛飾でという方が、定年退職をされる前後くらいで「地域の歴史を知りたい」と、そういったかたちで来られる方が結構いらっしゃいます。あとは、考古学ボランティアと謳っていることもあって、どうもあそこだと発掘とか遺跡に関われるんじゃないかと、そういうことにすごく興味があって、区外から参加される方も何人いらっしゃいますね。

石川：龍馬の生まれたまち記念館は、高知市にあるんですけれども、ほとんどが高知市民ですよ。何しろ高知県は人口かつては80万と言っていたのが、75万を切っちゃって、今年衝撃的だったのは72万を切っちゃったっていうくらいで。そのうちの35万くらいが高知市ですから、もう高知市民がほとんどなんですね。

室戸の少年自然の家は、体を使うことが多いですよ。キャンプファイヤーですとか、ウォーキングですとか、カヌーですとか。ですので、大学生のボランティア、毎年入れ替わりが激しいんですけど、やってもらってます。その他に地域ごとのイベントでは、国際ソプロチミスト室戸っていう女性の団体ですとか、老人クラブの人が来たりとか、個人的に自然の家のファンだったりとか、いろんな人が関わっているということが言えます。

それから参考になるかどうかわかりませんが、私は平成元年から国立科学博物館でボランティア担当をしてたんですけど、昭和の時代から平成の初めの頃までは、圧倒的に主婦が中心で

した。日常的な仕事をもっていない、いわゆる主婦の女性を中心でした。平成の一桁代になってから、だんだん男性の定年退職、女性もですが定年退職後の人の参加が本当にどんどん増えてきました。

先程もちょっと言いましたけど、辞めていかないですよ。辞めていかないとですね、どんどん年取ってっちゃうのと、やっぱり弊害があることもあるんですね。ボスみたいになっちゃったりとか、あるいは、かなりくたびれてきているとかですね、なんかあると寝ちゃうとか（笑い）、いろいろあったりして。そういうときは辞めてもらったりしながらも、全体的に年齢が上がって来ちゃって、あそこのボランティアは年寄りだよなっていうのがあって、若い人をいかに入れるかというので、制度を変えて、毎週必ず活動ということではなくて、年に何日活動するっていう制度の若いボランティアを導入するとかですね、制度として手を入れながら。やっぱり、悪い方で占められちゃいけないんで、年取って来てくたびれちゃった人は、ボランティアじゃなくてボランティアフレンズという名前をつけて（笑い）、そういう卒業生みたいな、親睦団体みたいなをつくったりとかですね、いろんなことをやってきました。以上です。

司会：その他、課題はどうですかっていうことで、今、石川先生からは科学博物館におけるいろいろなお話しがあつたかと思いますが、よろしければ葛飾のお話をいただければと思います。

五十嵐：はい、同じくですね、ボランティアさんの高齢化というものが当然進んでいます。参加人数が80名前後で毎年推移しているというのは、だいたい10名くらいがお辞めになられて、10名くらいが入られる、というような感じで回っています。始まった当初から参加されているという方も当然まだいらっしゃるわけですが、ウチの場合、お辞めくださいとは言えない、言わないので、今のボランティアフレンズっていうのはいいアイデアだなと（笑）。それは、こちらとして困るというのではなくて、ボランティアさんはせっかく活動に来ているのに、たとえば今日の活動内容が「注記します」って言うと、まずもって「目がちょっと見えない。」（笑）でも、「きょうは

注記をしなくてはいけないんですよ」と言っても、もちろん、目が見えないと。「いやあ、ちょっと見えないし、手が震えて書きづらいし、小さい」とかっていう話になって。そうやって言っても、出て来られる方はいいんです。中には、すごく責任感が強いので、「やっぱりもう迷惑になっちゃうから、参加は」って。先程の写真で、防空壕の中で話されていた方がそうなんですけど、お役に立てないんだったら、みなさんの迷惑になるから参加できないっていうことになってしまうんですね。そうならないようにするにはどういいのかということで、この本を作るときに課題として挙げたのが実はそこで。じゃあ、そういう人にも配慮した活動内容ですね。先程石川先生のお話にもあったように、博物館の中にはいろんな活動があるので、そういうのをこちらからいろいろ見つけて、発見して、「こういうのだったらできますか」とか、たとえば、その人の得意分野を活かすような、通り一辺倒のウチは調査をするのでこういうふうな活動だけですかではなくて、いろんな人が参加できるような活動内容を考えていかなくてはいけないな、というのが今その課題に対してアプローチしていることになります。

谷口：課題というか、愚痴になっちゃうかもしれないですが、25年近くボランティア活動を担当していますと、館の中でも当たり前風景になってしまっていますし、組織からは普通にやっているから、あんまり評価されていないのではないかと思うのほどです。

例えば、私と五十嵐さんが、4月から5月の前半に考古学ボランティアの講習会ということで、その間、毎週日曜日に午前・午後一コマずつ講習会をやるわけです。その準備もありますし、阪神の「死のロード」よりきついんですよ（笑い）。毎年のことだから、それがもう当たり前だと館の中は見えてしまっている。考古学ボランティアだけではなくて葛飾探検団もそうですけども、積み重ねてきたからいろいろできるようになってきたので。それが大変そうじゃないなって感じになってしまっているのは少し問題だなと思っています。すいません、つまらない話してしまっ。

司会：ありがとうございました。よろしいでしょうか。いろいろと話題出てきましたけれども、ど

ちらからでも、まだ、少々お時間ありますので、ご質問いただければと思います。いかがでしょうか。

3 ボランティアをお断りしたい場合

井上：木更津市郷土博物館金のすずの井上といいます。今日は、本当に貴重なお話をありがとうございます。それぞれの方にお聞きしたいなと思っていたんですけども。



まず、石川先生にはですね、先程、ボランティアからボランティアフレンズへという非常におもしろい話をお聞きしたんですけども、たとえば、ボランティアをちょっとご遠慮願いたいというようなお話しをするときに、実際どういうふうな話し方をしているのかな、と。実はウチの博物館にもボランティアの方がいらっしゃるんですけども、なかなかですね、こちらの意図が伝わらないという場合もありまして、その辺のテクニックみたいなものがもしあれば（笑い）教えていただきたいな、というのが一点です。

葛飾の博物館のお二方には、これはちょっと生々しいお話かもしれませんが、基本的にボランティアは無償だというお話しを伺ってはいるんですけど、実際に完璧に無償なのか、あるいは何か活動費みたいなものをボランティアの方々にお出ししているのか、それに予算をとっているのかというようなお話しをお聞きしたいと思いました。以上です。

石川：私は、平成元年から15年くらいボランティアを担当していて、たとえば、お客さんがいるところのソファで寝てるボランティアがいたら、注意をして、次やったら辞めてもらうとかですね、で、実際辞めてもらったとかですね、ボ

ランティアのレベルをある程度保ちながら士気を高める、ボランティアとしての誇りと士気を高めるために強く出ていたというのがあったんですけど、ボランティアの担当が代わるとそういうこともできなくなってくるんですよ、若い人になってくると。まあ、人にもよりますけれどもね。

でも、数年前というか、ここ2～3年で劇的な変化が生じてます。それは何かって言うと、先程も出ましたけれども、探検フロアという青少年向けの展示コーナーがなくなっちゃった、つぶしちゃったんです。で、そのことによって、その活動をする人達は、お役御免になった。それとガイドツアーというのもなくしちゃったんです。それで、その活動をしていた人達もお役御免。で、新たに始めたのが常設の展示室にワゴンを持って行って、そのワゴンにいろんな標本資料を載せて、それで説明したり、そういう活動なんですけれども。それをできるようになるためには、試験をするんです。それでガラッと、それまでずっとやってた人も落っことしちゃうとかですね。私がいないう間ですけどね。それで、室戸にいた私に「助けてくれ」ときたけども、私もどうしようもなくてですね、いろいろ泣きがはいったとかですね、恨みをもったとかですね、そういうのがあったようですけども、今劇的に変えてどうにかしようとしています。

それから私どもの館ではやってませんが、別のあるところの館では、任期制というので、初めから決めて導入しているところもあります。たとえば3年とか5年とかですね。ただ、それだとちょっともったいない人もいるわけですよ。だけれどももったいないからこの人はもっと長くやって欲しい、というのがあっても、そこで、この人は残したいけど、この人は残さないという、評価があってそれもまたむずかしい。というので、一律にそこで一旦は終わってしまう。そういうことがあったりします。長くいたりとか、困った人をどうするかっていうのは、導入したらこれ一番のたいへんな問題だとは思いますが、ま、頑張ってください（笑）。

4 ボランティアの無償性

谷口：いくつかまとめていいですか。まず、石川先生からお話しをしていただく前に、大切なのは、「うちの博物館が導入しようと思っているボランティア活動というのは、こういう考えでやりたいと思っています、それに賛同していただければ、ぜひ参加していただきたい」というその理念とどのような活動をしていくのか、しっかり発信することだと思います。そのうえで研修とか受けていただいて、その上で登録していただく。

そして、仕上げとして石川先生のお話しを聴いていただくと。活動に向けての心構えができるのだと思うのです。特に考古学ボランティアの場合は、扱う資料が文化財であったり、遺跡であったりしますね。国民共有の財産ですから、それを扱うという重さそして責任、そういうふうなことも含めて、しっかり初めにお話ししておくということが大切だと思います。

先ほど博物館ボランティアの理念と活動内容をしっかり情報発信するというのをいいましたが、私たち（博物館）が思っていることと、ボランティアさんの思っているボランティアのイメージが違っていたら、良い活動にはならないということです。それは、例えば無償制の問題とも関わってきます。初めに当館では活動の対価として金銭をお払いししますとか、しませんとか、そういうことを前もってきちんとっておかないといけなわけです。当館では、ボランティアの方には交通費とかそういうものはお支払いしていません。ただし、活動していくうえで消耗品などは、そういうものは予算化されていますし、それと活動していただくうえでボランティア保険に役所で入っていただいています。

そういうふうなはじめの手続きをきちんとやっていますので、ボランティアさんから私の思っていたボランティア活動とは違うとか、お金がもらえると持っていたなどということは生じないわけです。また予算的なこともボランティアさんは知っているの、かえって活動費を自分たちで捻出するために、いろんなことを工夫しているのです。ボランティアさん方がお金を出し合って絵葉書を作ってそれを販売して、その利益を活動費に回したりとかしています。最近の取り組みを五十嵐さん紹介してくれる。

五十嵐：そうですね、グッズの一つとして今最新のものですね、葛西城という、葛飾に中世のお城があるのですが、葛西城から出てきた青花器台を模した手拭いを作って、これから販売しようとしています。手拭い自体もですね、葛飾の伝統産業、葛飾の工場の方をお願いをして作ってもらって、葛飾の地域の振興をしながら、遺跡から出てきた物を活用していく。そういったかたちでグッズを作って活動費を捻出をしています。そのグッズを作るに当たって、最初は一口千円とか言って、皆さん出資して作っているのですが、そのうち売れて売上げが出てくると、それから今度はまた新しいグッズを開発していくという感じの流れをつくっています。

司会：よろしいでしょうか。

井上：ありがとうございます。

司会：そろそろ終わりのお時間も近づいてきましたが、ご質問の方はよろしいでしょうか。

どうですか、先生方、これ最後にひとこと言っておきたいなということがあれば。では、石川先生からひとことずつ頂戴してよろしいでしょうか。

5 ボランティアのすすめ

石川：はい、私は、再雇用じゃなくて、定年退職後の非常勤職員なんですけれども、今が一番苦しいときなんですよ。と言うのはですね、給料が三分の一くらいに減りましてね。あんまり減ると厚労省か何かからちょっと補助が出るんですけどもね。で、去年の住民税を室戸市にもものすごく払ってるんですけどもね。で、3年間電車に乗らない生活から、今は満員電車ですらなくてしょうがないんですけども。

そのうちこの生活を止めて、年金が出るようになったらですね、ある程度働いてボランティアをやろうと思ってるんですね。そのときに今の科博のボランティアだったらあまりやりたくないなと（笑い）。科学博物館の職員なんですけども、歴史が好きなもんですから、古い歴史、古い史料と歴史を考える会とか地元にあたりして、そういうのに入ってみたいなと思ったりしてます。一兵卒というかですね、出家したつもりでやろうと思ってます（笑い）。そういうふうな人が、私は

川崎ですけど、千葉にはたくさんいるはずですよ。もったいないですから、ぜひそういう方を取り込んで、地元を大切にしたい地域に立脚した愛される博物館の一助になるように、ぜひ導入されたいかがでしょうか、と思います。以上です。

谷口：今日は、もっと地域博物館ということを強調しておかなければいけなかったなあと反省しています。県立や私立の博物館ではなく、地域博物館におけるボランティア活動ということでお話しさせていただいています。

それと、ボランティアと自主グループの違いをしっかりと識別しなくちゃいけないと思います。それは参加している人もそうなのですが、実は導入する側がその違いをわかってないと、混乱してしまうと思うのです。そのような状況がよく見られます。ザックリいえば博物館ボランティアは博物館の掲げる目的に沿って活動する、いわば社会貢献です。一方、自主グループは同好の士が集まって自分たちの目的を達成するのであって、全く立ち位置、ベクトルが違っています。

なぜボランティア活動を博物館で導入するのか、その辺を含めて導入する館側は考え方を整理してから行わないといけないのであって、予算が無い、人手が無いからボランティアを導入するというのとは一番悪いパターンだと思います。

最後にお話ししたいのは、ボランティア活動は博物館学芸員を育てます。単に博物館学芸員だからってボランティアさんはずいてきてくれませんから。それなりに信頼関係をもつことが大切です。それから学芸員としてのスキルをちゃんともたなかったら、ボランティアさんは話を聴いてくれません。そういう意味では学芸員としての調査研究への取り組み方が違ってきます。それにみなさん私よりも年上の方ばかりですから良い人生経験にもなります。ボランティアを導入したことによって、私は逆に育てられたなって、今年間際にして思っています。

五十嵐：私も今、谷口さんの話しにあったように、正直ボランティアさんの前に立つというのは、10年やってるとは言っても、やっぱりこわいですね。見られてるっていうのがあります。

常に反省、自分で成長していかななくてはならないなと思います。一方でやっぱりボランティア

さんがいるからこそこれまでできたな、というのがあります。当館の中でもボランティアに対して考え方が違うなど活動を進めていくのに障害がないわけではないのですが、ボランティアさんと会えば、頑張っとうろうと思える。

そういう支えてくださるのがボランティアさんなのかなと思います。なので、やっぱりボランティアを勧めたいなと思います。

司会：三先生、どうもありがとうございました。これにて質疑・討議を終わりとさせていただきます。それでは、閉会に移りたいと思います。

閉会のあいさつを千葉県博物館協会調査研究委員会理事の平賀千葉県立現代産業科学館館長にお願いいたします。

平賀：石川先生、谷口先生、五十嵐先生、本当にありがとうございました。本日はたいへん蘊蓄のあるお話しを伺うことができました。私自身もたいへん勉強になりました。いろんなキーワードを私なりに探してみたんですけども、まあ、皆さんしっかりとメモ等をとられていたと思いますので、私が言うほどではないのですけれども。

まず感じましたのは、石川先生のお話し、非常に整理されたボランティアそのものの概要、そもそもどんな活動なのか、それからその意義ですね、どういう意義があるのか、そして連携ということで、私のような素人にもわかるようなかみ砕いたお話しを伺うことができました。そして最後は石川先生の将来構想までお伺いすることができましたので。ボランティアというのは、全く過去の経歴をフラットにして、「一から始める」というところが大切なんだということが伝わってまいりました。

それから谷口先生には、今記録しなければ無くなってしまふよ、だからやるんだと。その時にしっかりと目的を持って、ボランティアと目的を共有しながら、そしてやりっぱなしじゃなくて、それを生かすために成果をしっかり発表して行くんだと。そういうお話しがとても印象深かったなあとと思っています。そして、最後に「ボランティア活動が学芸員を育てるのだ」という言葉がキーワードになっているのかなと感じました。

そして、五十嵐先生ですけれども、館としてのボランティアの生かし方について、たぶん実践の

中で非常に苦勞も多いのかなというふうに思いましたけれども、ともにやっとう行くという姿勢をすごく感じました。子ども達と職員との間にボランティアがしっかり入って一つの活動をつくっていく、というお話しも印象的でした。その中でキーワードとしては「人生スキル」と。自然にみんなが築いたスキルを生かして行くんだと。通訳の話しですとか、インバウンドの話しですとか、自分達の歴史は自分達の手でという、そこに集約されて行くのかなあとというふうに私自身解釈したところでございます。

お三方それぞれに意義深いお話しを伺うことができ、これからのわれわれの活動にも、本館のボランティア活動にも生かしていけるかなというふうに思っております。きょうは本当にありがとうございました。（拍手）



平成29年度 千葉県博物館協会研究報告会

テーマ：「博物館が結ぶヒトとマチー博物館と地域づくりー」

1. 日 時 平成30年1月31日(水) 午後1時50分～4時30分

2. 場 所 千葉県立現代産業科学館研修室

3. 主 催 千葉県博物館協会・調査研究委員会

4. 日 程 開催挨拶

趣旨及び日程説明

講演1 「町おこしでできた金谷美術館～地域での取り組み～」

金谷美術館 館長 鈴木 裕士 氏

休憩

講演2 「房総の山のフィールド・ミュージアム事業と地域のかかわり」

千葉県立中央博物館 房総の山のフィールド・ミュージアム担当

主任上席研究員 尾崎 煙雄 氏

休憩

質疑・討議

コーディネーター 和洋女子大学人文社会科学系 教授 駒見 和夫 氏

閉会挨拶

講演1 町おこしでできた金谷美術館～地域での取り組み～

金谷美術館 館長 鈴木 裕士

改めまして皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました金谷美術館の館長を仰せつかっている鈴木と申します。館長という役目を仰せつかっているわけですが、美術あるいはそういった文化的なものに造詣が深いわけではありません。学芸員の資格もございません。または、地域でいろいろな活動をする中で、たまたまそういう役目を担って今がでございます。ですので、このような場で皆さんに有意義なお話を出来るか非常に不安でありますし、果たして皆様が今日来て得るものがあるのかどうか自信はないところであります。ただ、地域を盛り立てようという活動は10年以上活動してまいりましたので、そういう中から多少なりとも参考になるお話が出来れば良いなと感じております。40分というお時間ですので、一生懸命務めさせていただきますのでよろしくお願い致します。

町おこしをしてきたということですが、金谷という名前より鋸山という地名を皆さんに説明した方がわかりやすいと思います。千葉県の方ですと知らないという方はおそらくいないと思いますが、何年か前に、一番千葉県を象徴する山はどこですかというアンケートを取ったそうです。その時に鋸山が千葉県を代表する山だというアンケート結果になったそうです。房州の三名山などと言われ方もします。富津市金谷というところに私は住んでおりますが、その金谷と隣にある鋸南町との境の山でして、この山の麓で私どもの美術館は運営をさせていただいています。

金谷美術館は2010年の3月に開館いたしました。今年の3月で8年目を迎える美術館です。現在、千葉県から承認をいただきまして公益財団として活動させていただいております。役員、理事、評議員その他含めて、地域の区長さんですとか、有志そして会社の経営者など地域の方が主体になって運営している美術館です。美術館ができた経緯などから美術館が中心といいますか、私どもの美術館に携わって、運営側が、地域の区長さんであったり、あるいは観光協会の会長さんであったりということでございます。したがって、通



常の展観事業以外にも、地域活動というのは切っても切れないわけで、そういったことから活動を続ける中で、意図するしないということではなくて、私どもの美術館にとって地域活動はそうせざるを得ないというような環境であったから行ってきたことでございます。

今写っているのが鋸山でございます(写真1)。ちょうど海から見た写真でございます、鋸の刃のようにぎざぎざしている山です。この鋸山、房州石という石を切り出した山でございます。江戸時代から切り出して、約300年近く江戸の中期から昭和60年までずっと石を切り出しています。一説には石を切り出してぎざぎざになったから、鋸山と呼ばれたと言われていましたが、最近鋸山の研究をしている中で、どうも石を切り出す前から山の形状がぎざぎざになっていたの、それで鋸山だというふうにいわれているというのがわかってきました。



写真1

こちらは鋸山の山頂から見た金谷町です。非常に小さい町です。端から端まで歩いて10分足

らずでいけるでしょう。町内には、東京湾フェリーがございまして、対岸の横須賀の久里浜まで東京湾で唯一の海上航路がございます。最盛期には210万人を運んでおりましたけど、アクアライン開通後、乗船客が激減しまして、現在70万人弱、3分の1におちこんでしまいました。

あと町内には、鋸山に登る鋸山ロープウェーがあります。JR、海上輸送、ロープウェー、小さな町にこれだけの運輸機関があるのは千葉県でもここだけらしいです。そういった特徴のある町です。町からは富士山がよく見える。あと地獄のぞきという鋸山の景勝地は、よく写真に出るものです。実はこの地獄のぞきも含めて、先ほど言いました石を切り出した跡です。もともとは一つの山だったんです。石を切り出す過程でこういった切り取った跡が景勝地になっています。町内にはこのように房州石を使った石塀ですとか蔵ですとか、そういうものがたくさん残っています。しかしながら昭和60年を最後に鋸山の麓聖地金谷から石切りが途絶えていますので、次第にそういう風景が年々なくなってきております。

例えば自分の家を新しくする方なんかは、当然今風のおうちにしたりするわけで、資材としても房州石がもう供給できなくなっていますので、どうしても古い房州石よりは新しい素材になってくる。徐々に、そういう石の風景が失われつつあるのがちょっとさみしい感じがしております。保存活動なども私どもは力を入れさせていただいております。例えば、房州石を解体するお宅があると、石をもらいに行ったり、そういった石を保存する活動を町内はもちろんですけど、対岸の三浦半島等でも房州石はかつて使用されていたので、話ができれば引取りに行ったりしており、そういう石の保存活動なんかもやっております。

こちら、金谷美術館別館の石蔵ですけど、こちらも見ただければわかるとおり、正面の門が石できております（写真2）。明治35年の築ですけど、町内にはこのような房州石を使った建造物もたくさん残っております。

房州石が盛んに切り出されたのは幕末から明治・大正にかけてと言われております。そこわかるかもしれませんが、そちこちに横筋が入っているんですが、これはですな全部石を切った跡でござ

います。当時はつるはしのような道具で一本一本切り出していました。最盛期にはこの山から年間で56万本切り出されたといわれています。1日やって石工さんがだいたい8本しか切り出せなかったということですので、



写真2

56万本という数字から、非常に多くの方が、この山で石切りに携わっていたということが分かると思います。

当時の山の様子を見ますと、山から白い氷河のような筋が見えますが、これは石を切った切りかすです。石の切りかす、我々はずりと呼んでいますが、これも、当時石を切り出すことによって、切りかすも大量に出たわけですね。それがずっと麓に滑り落ちているような状況でした。

こちらは、明治の終わりごろの写真だというように言われておりますが、よく見ていただくと、石工がいたり、切りだした石が並べてあったり、非常に多くの方が山で仕事をしていた様子がわかると思います（写真3）。ちなみにこの写真の場所が、今の鋸山のどの場所かはわかりません。わからないというのは石を切り出して、山の形がどんどん変わっていつの間にか変わっているの、おそらくあそこへんじゃないかという推測はできるわけですけど、この写真だけでは正直判断できない。それだけたくさんの方が切っていたんです。ちな



写真3

みに明治に正岡子規がこの山を訪れておりますが「この山は100年後にはなくなってしまうだろう」というふうに日記に書いてあるそうです。そ

れだけたくさんの方が石を切っていた様子がそこからもわかるということでございます。

そういった石の歴史がある山であるのと、あともう一つ、鋸南町側に日本寺というお寺がございます。空海も業に訪れたと言われておりまして、725年に聖武天皇の命によって作ったとされ、関東で一番古い勅願寺と言われております。2025年には1300年を迎えるお寺でございます、そういう意味では非常に歴史の古い名刹であるわけです。ちなみに、日本寺は昭和14年に火事で焼失してしまっておりまして、本堂あるいは国宝級のものもあったそうなんですけど、そういったものが燃えてしまっております。しかし、今現在は、2025年に向けた復興事業で、本堂など現在かなりのものが出来上っています。建設に当たっては法隆寺を修復した、有名な宮大工のチームが手がけておりまして立派な本堂が2025年より前にできるんじゃないかと思っております。

東山魁夷さんが描いた「晩照」という作品があります。昭和29年、魁夷さんが金谷に来て描いたそうです。そういった芸術家がたくさん訪れた歴史があります。江戸時代にもたくさんの文人や芸術家がこの金谷を訪れたと言われておりまして、こういったところから、町おこしを始める時に、「石の切り出しの歴史」とアーティストたちがたくさん訪れたし歴史から、「石と芸術の街」にしようじゃないかと。そんなテーマを地域の皆さんと共有しながら始めました。

石切り自体は明治・大正、非常に栄えたわけですけど、大正12年の関東大震災により甚大な被害にあい、この鋸山の石の事業にも大きな転換期が来るわけです。震災によってだいぶ石切り場自体がダメージを受けたのもそうですけど、当時セメントが普及するようになりまして、石を使った建築物自体が徐々に衰退に向かい、セメントにとって代わるようになったわけです。最盛期には町民の8割の方が石切りに従事していたと言われております。あとは町内に30件近くの石の元締めがあったと言われております。関東大震災以降は30件あった元締めが一桁になり、石に従事する人も少なくなりました。戦中戦後を通じて石の事業が行われたわけですけど、昭和60年を最後に、金谷町からは石切りの事業が途絶えたわけです。

それによって、この地域の経済を支えてきたのが観光ということになります。東京から比較的近い一泊圏内だったことと、鋸山が景勝地でありました。また、房総はどこでもそうでしょうけど、新鮮な海の幸が食べられますので、昭和30年から40年にかけては、金谷の町の観光が非常に賑わっていた時期がございました。

鋸山観光ホテルというホテルがありまして、昭和30年代初期に建てられたものです。房総では当時最新鋭の観光ホテルということでもかなり賑わっていました。私もちょうどこの時に子どもの時代を迎えていたわけですけど、夏になりますと、都会の方がたくさん遊びに来ていて、ここに来ると都会の香りがするようなことをすごく感じました。非常に町自体が賑わっていた、そんなような時代だと感じています。

観光の時代も昭和が終わり、平成になって変わってまいります。一つには交通網がいろいろ発達したり、あるいは地域として観光に対する努力が不足していたんでしょうか。房総の観光というのも徐々にかつてのような賑やかさを失ってきました。

これはだいぶ古い資料で申し訳ないのですが、今現在金谷町人口は1500人を切っております。世帯数ですと600件くらい。一人暮らしのお年寄りが非常に多いので、少子高齢化が進んでおります。現在金谷小学校という小学校があるんですけど、全校生徒が37名しかおりません。このまま行くと、あと数年で合併となり、金谷小学校が無くなってしまおう。加えまして、お年寄りが非常に多いです。おそらく現在、正式な統計は無いのですが、65歳以上の方は45%以上になっていると思います。そういう意味では日本の最先端を行っている地域なんですけど、そういう流れの中で町をどうしていったら元気にできるのかというのを、町内の有志の方とお話し合う機会が当時設けられました。そんな中から、地域活動が進んでくるわけです。年々人が減っていく、お店が無くなるというのは、決して数字とかじゃなくて、肌感覚、もう生活の中でそういうのが切実に感じられるわけです。私も地元の観光協会におりますけど、その会員数がどんどん減って、お店が無くなる。あとは、かつて一緒に地域おこしをしていた方が

本当に亡くなってしまったりとか、またお葬式もとても多いです。先ほど1500人と言いましたけど、このまま行くと40年後にはですね、町の人口がいなくなっちゃうんじゃないか。そんなような計算通りにはならないとは思いますが、そういうことが生活をしている中で非常に切実に感じられる地域です。

そんな中でどうしていこうかということで話し合いをし、どういう町にしていってよいかということで、最初に考えたのが観光です。経済の基盤になっておりますので、観光を盛り立てていかなければいけないのではと考えました。ただそれを、今これがはやっているからとか、こういうものが若い人に受けているからとか、そういうものじゃなくて、やはり金谷の町が、今までどういう町だったのか、あるいはこの金谷の町が他の地域と比べてどういうところが特徴なんだ、そういったところをきちんとみんなで共有して、その上に新しいものを付け加えていくのがいいのではないかと言うことを教えていただきました。その中で、先ほどからいろいろ話していますが、鋸山の石の話とか、芸術家の方が来たという歴史を紐解きまして、そこら辺の所からスタートしていったということです。

最初に始まった事業はですね、観光案内所「石の舎」です。これは町内の農協さんが撤退した建物です。ずっと空き家になっていたのですが、観光案内所がなかったの、それにしようじゃないかと。美術大学の学生さん二人、北海道から来ていただきまして、お金がないものですから、交通費と材料費だけは出してあげるよということでお話ししたんです。そうしたら、二人来てくれる方がいらっしゃいます。泊まりは町内の空き家に泊まらせていただき、約一ヶ月観光案内所をですね、リニューアルしてくれました。こんな感じできれいになっています（写真4）。今ここはですね、その後いろいろな経緯



写真4

があって、ピザ屋さんとして非常に繁盛しております。なぜピザ屋さんかという、鋸山の石というのは凝灰岩といって非常に熱に強いんです。大正時代に鋸山の石のパン焼き釜が非常によく売れたという話がありましたので、鋸山の石で釜を使ってピザとかパンを焼いたらいいのではと思ひまして、町おこしの中でやっていたところ、ピザ屋さんをやったらいんじゃないかということになりました。それで、金谷に移住してくれた若者がピザ屋さんを担当しています。

なぜ、他所から呼んだかということさっきお話しした通り人口が非常におりません。例えば町内でイベントなんかをするのですが、イベントをすると個人営業のお店のご主人なんかは、自分のお店を休んで、そのイベントの切り盛りをさせていただきます。商売を元気にするためにイベントをやっているんですけど、商売を休まなきゃ出来ないと、まさに本末転倒なことになるわけです。そういう意味でプレーヤーが非常にいない。プレーヤーがいないからどうしようということで、いろいろ皆さんで考えた末、じゃあプレーヤーを他所から連れてくればいいじゃないかと。当時、こういった地域貢献とかあるいは社会問題に関与する若者が少なからずいるという話を聞きまして、そういう団体さんをお願いをしまして、その関係から、北海道から来ていただいたり、東京から来ていただいたり、いろいろな学生さんのついでで呼んでいただいて、地域活動をこのような形で一緒に手伝ってくれました。

我々は、もともと自前の予算はないんですけど、例えば海で取れたお魚を漁師さんが持ってきてくれたりとか、あるいはお惣菜をおばあちゃんが作りすぎたから差し入れしてくれたり、そんな形で、地域の方に協力を少しずつ働きかけて、若い人たちの受け入れをしておりました。町内でやっている夏祭りでは、書のパフォーマンスを行ってもらったりしております。また、書を専攻している学生さんがおまして、ライブに合わせて書のパフォーマンスをしていただいて、こんなイベントにも若い方にも参加してやっていただいております。今現在も金谷の夏祭りは8月の最後の土曜日にやっておりますけど、この時ぐらいからスタートして、毎年毎年、金谷の一つの風物詩になって

おります。学生さんには石の彫刻も作ってもらっています。アートがテーマなので鋸山の石で彫刻を作ったらいんじゃないかということで作ってもらいました。この時のタイトルが、学生さんたちが考えたんですけど、非常によく考えたものであって、みなさんにご紹介したいんですけど、「さあ、行こう」というプロジェクトなんです。「さあ行こう」というのは、金谷に「さあ行こう」、レッツゴーという意味なんですけど、最高という意味と再び興すという意味と、再び交わるという意味、再び光るという意味、この思いを込めて「さあいこう」というふうに、彼女たちが考えたんですね。非常にいい名前だと思ってみんなで感心したんです。そういうことで学生さんたちの柔軟な発想を取り入れながら、やっていただくからには、皆さんの喜びになったりしていかないといけないと思うので、そういう意味では非常に一ヶ月という短い期間だったのに、非常に楽しんでくれました。今はもう立派な社会人でバリバリ働いています。また、たまに遊びに来てくれればいいと思います。

これが、作成してくれた彫刻です（写真5）。石の刻道（こくどう）、国の道じゃなくて、刻む道と書いて刻道です。これは全部で23体ございまして、これを人通りが少なくなった金谷の街の旧道沿いに今も配置しております。一個一個に名前が付いておりまして、イベントの時にはこういうものを回るスタンプラリーということもしております。



写真5

また、2009年からずっと続く石の街シンポジウムという取り組みがあります。全国で石を研究している研究者がたくさんいらっしゃるわけですけど、これは鋸山の石の歴史にとっても興味を持ち、

鋸山の石切り場は、一か所でこれだけの規模で、しかもきちんと石切り場の遺構がきちんと残っているのは、おそらくここは日本で最大級であろう、と言っていていただいております。そのようなうれしい話をいただいて、ついでにはそれをただ単に、「凄いぞ」と言っているだけではなくて、全国から石の研究者を招いてここでシンポジウムをやったらどうですかというアドバイスをいただきました。今現在もお世話になっているんですけど、石川県の石の研究者の方とか、山梨県の専門家の方とか、今現在のシンポジウムを中心に動かしております。実は毎年秋にやっているんですけど、今年で第10回目を迎えることになりました。先ほどから、歴史をずっと話しておりますけど、実は鋸山のお話ができるのもこういう歴史のシンポジウムをずっと続けてきた成果です。

それから、鋸山の石をどういうところで使われたのかというと東京のお台場ですとか、横浜の開港ですとか、外人居留地、今の港が見える丘公園とか外人墓地があるんですが、あそこら辺は房州石だらけです。あとは新橋の駅、最初に汽車が通った時に、駅の造作には房州石がたくさん使われた。いろいろなところでこの房州石が使われたという事実がわかってきていまして、これも石のシンポジウムの成果だということです。

そんな活動が続ける中で、何で美術館が出来たのかということですが、それは「石と芸術の町」というテーマで町おこしをしている中で、美術品を寄贈したい、ぜひ役立ててくれというお話が参りまして、そんなことから美術館の構想がスタートします。先ほどお話に出た房州石の石蔵ですが、場所がございませんので、この当初、本当に荷物置き場になってたような倉庫だったんですが、そこをボランティアの皆さんと一緒に掃除しまして、美術館のプレオープンが出来ました。最初は本当に要らないものだらけだったんですが、今では美術館の別館として立派に機能しています。制作にあたっては、美術館の本館が翌年スタートするんですけど、財団という組織を立ち上げてみんなで作る美術館にしようじゃないかということで進みました。町内の方ですとか、地元の小学校の方にですね、外構工事、芝刈りなんかを手伝っていただきました。あとは、非常にお世話になっ

ております千葉県職員さんですが、今日も近い方がこの会場にいらっしゃっているんですけど、その方にお手伝いいただいて、美術館のこういった扉が漆で仕上げていただいてあります。ということでこの金谷美術館が2010年3月にオープンいたしました（写真6）。



写真6

今現在、財団法人ということで運営させていただいておりますけど、構想自体は皆さんの協力で作ったんですけど、やっぱり美術館事業というのは続けていくのは本当に大変でございます。今もいろんな方のご支援をいただきながら、8年目を迎えてまして運営をしています。オープニングの時にはですね、竹灯籠というイベントをやりまして。こういった形で、美術館をいろんな方に支えていただいて、今の美術館があります。決して、有名な作品があるわけでもございませぬし、作品で人を呼べるような美術館ではないと思っておりますけど、元々町おこしでできた美術館ですのでやはりこういった地域活動といかに連携していけるかというのが、やはりうちの美術館の存在意義だと思っております。

この図は、町おこしを始めた時にどんな感じにしていったらいいかというのを図にしたものでご

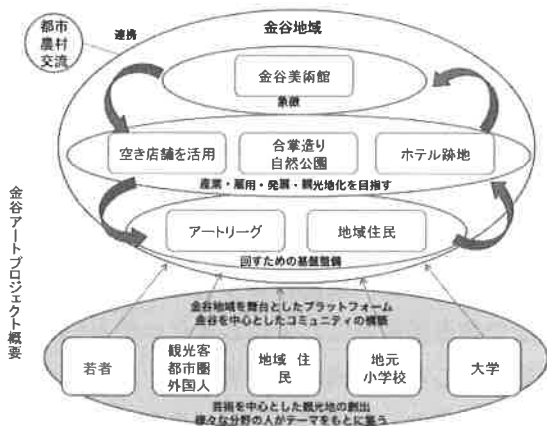


図1

ざいます（図1）。当時は、美術館も何も無かったんですけども、今約10年以上たってこれを見返すとですね、なんとなくこういう形づくりは出来てきたんじゃないかと思っています。金谷美術館が核としてあり、空き家、空き店舗、そういったものを活用していく。今は無いんですけど、空き家、ホテルの跡地をアーティストのアトリエとして、オープンしていた時期もございました。入居者も30軒近く、非常に成功したかのように見えたんですけど、古い建物なので耐震性の問題が出てきてしまって、現在クローズしていますが、そういったアトリエとして活用した例です。

あとはですね、町内に合掌造りといって白川郷から移築された建物があります。こちらも30年間使えなかったんですけど、ボランティアの皆さんで半年近く清掃をしてですね、今はカフェ&ギャラリーとして非常に繁盛しております。その他、空き店舗を活用して、最近金谷の町は飲食店が中心なんですけど、新しいお店が3店舗できました。お蕎麦屋さんが出来たりメキシカン料理ができた、あとはさっきのピザ屋さん。そんな形で使われなかったお店が、主に地域外からの若者の移住で新しいお店が出来て、徐々にですけど、人数が増えていきます。正式な統計はわかりませんが、今現在1500人の町ですけど、約40人くらい若い方がここ数年で移住して来ると思われます。出入りがありますが、いい形の流れは少しずつ出来てきているかなと思っています。ただ残念ながらさっき言った通り、毎年結構な方が亡くなったり、地域に住んでいる方が結婚して出ていったりということもありますので、そういった意味では町の人口は減り続けているということで



図2

ございます。なんとかこれをストップできないかということで今も努力を続けております。

こちら当初作った図です。外国人個人のトランジットという形で、当時夢物語で描いていました(図2)。皆さんの地域もそうだと思うんですけど、実は金谷は外国の方が非常に増えてきています。今は普通に外国の方が来るようになっております。それも鋸山の魅力をみんなで磨いてきたからじゃないかなと思っております。とは言ってもまだまだ、外国の方に地域内に滞在していただいて、ちょっと嫌な言い方ですけど、消費に結び付けていく、というところまではまだそんなには上手に出来ておりません。しかし、そういう流れが出来てきたのは事実でございまして、これもやっぱり活動を、失敗も多かったんですけど続けてきた成果じゃないかというふうに思っております。

鋸山を自然の博物館としていきたいと思っております。実は石切り場の跡は、外国の方にここに案内すると非常に驚かれます。これを全て手作業でやったと、それが日本人の几帳面さといいますか職人氣質といいますか、こういう石切りの作業の一つの中にも表れていると思います。やっぱりそういう素晴らしいものが鋸山の中にたくさん残っていると思いますので、これからもこういったことを上手にアピールしながら、広報をしていけたらと思います。

鋸山の石切り場の跡は、研究者の方にいろいろ聞きまして、通常の登山では行けないんですけど、将来的にはこういうところも行けるように遊歩道を整備したりしていけばいいなと思います。ただ、これはすぐに出来る仕事ではございませんので、行政の方の力を借りながらやっていきたいと思っております。出来る出来ないは別ですけど、富津市の市長が、一昨年変わったのですが、鋸山を世界遺産にしようじゃないかと、大きな旗を掲げてくれました。なかなか具体的な動きはまだ見えてないですけど、そういう掛け声をしてくれるだけ非常に大きな進歩だと思っています。

ちょっとお時間が来てしまいましたが、これが昨年、金谷で行われました南総金谷芸術特区、アーティストインレジデンス、作品展をやらせていただきました。去年の3月、その時に10名の

若い作家の方に金谷に約2ヶ月ぐらい滞在していただいて、町内にいろんな作品を展示しました。いろいろな方が金谷町に移り住んだりして来てくださったんですけど、そういったアーティストの方が来てくださるような環境作りがこれからのいいなと感じております。細々ですけど、こういう活動を続けることによって、テーマにしている石と芸術の街として、地域を盛り立てていきたいと思っておりますし、美術館としての役割をこれからも全うしていきたいと思っております。

最後ですけど、これは実はこの前の日曜日、日経新聞の記事なんですけど、ご覧になった方はいらっしゃるかもしれませんが、実は外国人が決めるDEEPJAPANというランキングで鋸山がなんと第2位になりました。DEEPJAPANというのは、富士山、あるいは京都、そういったゴールデンルートをもう飽きたという外国の方が、次はどこに行くんだということでアメリカ人とオーストラリア人にアンケートをとった結果で、なんと鋸山が第2位だったということなんです。非常にびっくりしたのですが、こういうランキングにこの山が出てくるようになったのも、少なからず地域の皆さんの努力の賜物じゃないかと思っておりますし、ぜひこういう流れで金谷から地域を盛り立てていけたらと思います。

お時間過ぎてしまいましたけど、以上で終わらせていただきます。まとまりのない話で大変失礼しました。ご静聴ありがとうございました。

講演2 「房総の山のフィールド・ミュージアム事業と地域のかかわり」

千葉県立中央博物館 房総の山のフィールド・ミュージアム担当

主任上席研究員 尾崎 煙雄

私がこれからご紹介させていただくのは、県立中央博物館の事業の一つであります房総の山のフィールド・ミュージアムという事業についてです。

先ほどの鋸山から山をずっと伝ってくると、この辺りにきますが、房総丘陵、千葉県には山はないと思われていますが、立派な山があります。そこで展開している活動です。人工衛星から見ると、関東地方、その周辺こんなふうに見えます。千葉県はここですね。ちょうど私がこれからお話しするのは、チーバクンの下半身の辺りになります（写真1）。少しの山と広い平野、都会部といった地理的な関係を頭に入れてお話聞いていただくといいと思います。これは地形図ですね。標高で塗り分けた地図です（写真2）。標高200メートル以上の所に、少しずつ標高によって濃い色を塗ってあるんですが、もう一目瞭然ですけども千葉県には、こんなごみのようなものしかないんですね。これが房総丘陵です。標高200~300メートル程度の低い山があります。有名な山は、ぐ



写真1

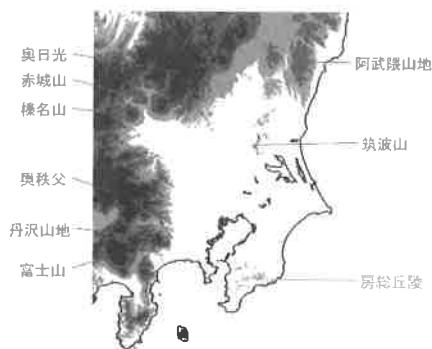


写真2



るってこの関東平野、取り囲んでいるんですけども、房総丘陵はこういう非常に低い小さい山であります。ところが実際にそこへ入ってみると、奥の深い、いろんな自然があったり、文化があったり、とても面白い場所であります。

また、人工衛星の写真ですけれども、皆さんに質問です。これは都道府県別森林率というものを表したグラフです。それぞれの都道府県の面積に森林が占める割合が何パーセントかというグラフです。1本のバーが一つの都道府県を表しています。全国平均が67.4パーセント、つまり国土の3分の2が森林だということが、ここから分かるわけですけど、千葉県はこのうちのどの辺りにあるでしょうか。この平均より上だと思える人、手を挙げてください。はい、ありがとうございます。下だと思われる方。ありがとうございます。

千葉の学芸員の皆さんには、ぜひ知っておいてほしいんですが、千葉の位置はここです。ほぼ最下位ですね。千葉と、大阪と茨城と最下位争いをしていますけれども、全国平均の半分以下、県の面積の3割ぐらしか森林がない。日本でも最も森林の少ない地域と言っていいと思います。それだけにこの緑一色に塗られた房総丘陵というのは、千葉県にとっては言ってみれば、緑の島のような存在です。大変重要な場所だと私は考えています。

もう一つ自然の背景の話をしてします。これが最後ですけど、これシカです。ちょっと古いデータ

なのですが、千葉県でシカが住んでいるのはこの色をつけた部分です。これも房総丘陵です。つまり、緑の島であり、こういう大型の動物が暮らしている、千葉県の中ではここしかないような自然環境の場所。それが房総丘陵だという理解をしていただければと思います。

さて今度、博物館のお話です。県立博物館ネットワークと呼んでいますけれども、今、千葉県には県立の博物館と名のつく施設、建物が8つあります。組織的には5つの館、分館を含めて8施設。そしてこのプラス1というのがこの房総の山のフィールド・ミュージアムなんですけれども、この房総丘陵の、千葉県南部のあの一带を主なエリアに活動しております。

テーマとしては、房総の山の自然文化を守り、育むこと。それからフィールドの自然文化全てを資料と考える。そして地域の人々やNPOと連携共同するという趣旨で、平成15年4月に活動を開始しました。このフィールド・ミュージアム事業の前段に当たる背景があります。これ県立中央博物館の構想を絵にしたものなんですけれども、県立中央博物館、本館は平成元年に開館しました。開館以前から中央博物館の大きな構想がありました。それは本館、そして生態園、それから海と山の分館っていう4本立ての構想だったんですね。平成元年に本館ができ、平成7年には生態園ができ、そして平成11年には、勝浦に海の博物館という分館ができました。

海と山という二つの対になる分館も構想にあったんですけれども、山の分館の方は財政難等でその後、できずに今に至っております。ところが平成7年からは、その山の分館の準備は既に始まっていたわけです。でもこのままじゃ、多分、博物館はできないぞ、ということで、平成15年に、じゃあ建物はなくてもいいから博物館を始めてしまえということで、スタートしたのがこのフィールド・ミュージアム事業です。つまり建物のない博物館として、スタートして今に至っております。

これから少し活動内容についてご紹介したいと思います。まず大体、このフィールド・ミュージアムでは、普通の博物館がやる事業は、大抵のことはやっています。展示ですね。山みち展示と

か、出張展示、細かくは後でご紹介しますが、まず展示をやります。それから観察会、山の学校といった観察会など教育普及事業をやります。それから房総丘陵の自然史、人類史という調査研究を行います。それから当然、資料収集も行います。三島小教室博物館というのがその拠点になっています。それからちょっと変わった事業として、おばちゃんの畑という取り組みもありますので、最後にこれも紹介したいと思います。

まず、順を追ってお話しますが、展示。これは簡単に触れますけれども、まずその自然観察路、山みち展示と名付けたもの（写真3）。これは房総丘陵の中、君津市の清和地区という所に清和県民の森という県の施設があります。そこの遊歩道を使って、このオレンジや赤で示したのが遊歩道ですけれども、道沿いにこういう立て看板のようなものを立てて、その道沿いで見られる自然、主に自然ですけれども、の解説をするといったような展示をしています。ですから山道を歩いて回ってくると、山道の博物館を歩いてきたような展示ということですね。ところがこれ、頑張ってる割にはそんなに評判は良くないので、どうかと思ってます。



写真3

そして、この他に、出張展示というのを年間何回かやっております。で、よくあるのがその左のほうにあります公民館などに出掛けて行って、博物館の資料とかパネルとかを飾る出張展示ですね。この出張展示は、例えば、千葉県南部の君津市だとか、館山市だとかそういった地域の公民館に呼ばれて、行くんですけれども、対象としてはその地域、公民館周辺の地域の方に来てもらう、見てもらうということが多い。そういう展示です。

実はこの展示で重要なのは、展示物、資料を見てもらうというだけじゃなくて、われわれ学芸員がずっとそこにいて、来た人と対話をするという、そちらの方が実は重要で、例えば、昆虫の標本を展示していると、「お、こんな虫まだいたんかね」と。「おらが子どもの頃はよく捕ったもんだが最近はこちらも見ねえぞ」、というような話をして、その昔の様子、今の様子とか、子どもたちのこととか、会話が弾むわけですけれども、そういう場としてこの公民館の出張展示というのは、非常によく機能していると考えています。

一方でこの右側のほうの写真が、出張展示、野外ですね。これは千葉県清澄山という山に、東京大学の千葉演習林という広大な森林を持った演習林があるんですが、そこが年に1、2回一般公開というのをしまして、その時期に合わせて林道沿いにテントを張って展示物を見せるという出張展示もやっています。これは非常に人気の行事で、1日に2000人とか3000人とかいうお客さんが来るんでね。ですので、この展示も非常に大勢の人に見ていただけます。で、この演習林の一般公開に来る方々というの、いろんな地域、県内各地、あるいは県外からこられる方も多いですので、外の人に向けての展示という意味合いが強い。で、かなり大勢の人に見ていただける。ただ残念なことに、実は災害があって、土砂崩れで林道がつぶれてしまっているというような関係で、ここ1、2年開催できていないんですけれども、こういった野外での展示もやってきました。

次です。今度は教育普及事業、山の学校という観察会をやっています。山の学校は今では4月から9月の毎月第3土曜日、月1回の開催で、清和県民の森あるいは三島小学校、いずれも君津市内の場所ですけれども、で開催しています。これ、ちょっと古いデータですけど、平成28年9月で通算132回。もうそろそろ140回になるという行事です。この山の学校以外にもさまざまな観察会を開催しています。観察会というのは大体、私に関わるものは生き物、植物や昆虫などをテーマにしたものが多いんですけども、さまざま、地質学をテーマにしたものだったり、あるいは人文系のテーマの行事だったり、いろんなことをやっています。

それで、地元の方がこの観察会にボランティアとして最近では参加して下さるようになってきています。この地元の方がボランティアとして参加というのは、実は、とても重要だと思っているのですが、われわれがこの地域で、山で観察会をやっていると最初の頃は、「こんな田舎で何も無いところに、あんたがた何をしにや来た」と、「何を見に来たんだ」と、「なんか見るものなんかあるのか」と、言われるんですね、地元の方から。でもそれを続けていると、「なんか知らないけどあの人たちは楽しそうにやっているから、自分もちょっと顔を出してみよう」というふうに関わってくれて、そのうち、ボランティアになってくれるっていう場合があります。

写真をお見せしますと、こんな感じで森の中に出掛けていって、親子連れが多いですけれども、あんまり遠くから来る方は多くないんですが、でも例えば、君津市の市街地、お隣の木更津市の市街地、袖ヶ浦市とか、それほど遠くない町のほうから参加して下さる方が多いです（写真4）。こういう行事とか川で観察会をやったり、あるいは昆虫、虫捕りの観察会をやったり、ヘビを持ってるところですけどね、これ。それから、泥だんごで学ぶ地質学、地質をテーマにした観察会であったり、小櫃川という川をテーマにした観察会であったり、いろんなものをこれまでやってきます。



写真4

次が調査研究ですね。これは私たち学芸員が主に関わって行う調査研究のお話を、簡単にだけしておきます。いろんなことをやってるんですけど、私自身がここ最近、関わったものとして一つだけご紹介しますが、あの清澄山系の昆虫相、要

するに昆虫ですね。先ほどの東京大学千葉演習林を中心に、清澄山という山があるんですが、そこは、千葉県内、房総丘陵の中でも、最も森林の発達した所です。ここで昆虫を集中的に調査しました。2012年から3年間、17年には報告書が発行されて、約3万点の標本を採って2766種を記録して。そのうち千葉県で初めて見つかったのが280種もいて、新種も2種見つかった。絶滅したと思われていた虫が3種も見つかった、みたいな。私たちが集中的に研究するとこういうことになるんですけども、こんなことをやってきます。これ、その一つが新聞、千葉日報に紹介されたやつですね。絶滅したと思っていたものが見つかりましたっていう話が出たりします。

学芸員はこういうことをやってるんですけども、この先、私たち学芸員による調査研究だけではなくて、その地域の方々がそれにどう絡んでくださっているかっていうこと今日お話ししたいと思っています。その拠点の一つとして位置付けられているのが、この三島小教室博物館です（写真5）。三島小っていうのは、君津市立三島小学校という学校です。この後、どの辺にあるか地図も出てくるんですけども、この隣に新しい鉄筋コンクリートの校舎があるんですが、これは古い木造の校舎です。



写真5

この木造校舎のこの部屋を、われわれお借りしてというか、これも経緯を話せば長くなるんですが、15年ほど前にいろんな授業のお手伝いをしたりとか、いろんなお付き合いがあって当時の校長先生が、「おまえらそんなにしょっちゅう、こっち来るんだったら、じゃあこの部屋空いてるから使ったらどうだ」みたいな話になって、そう

いうところから始まった事業です。この木造校舎のこの部屋ですね。これ、いいところは、ここに木の戸があるんですけども、外ですよ。外からこう行って、この戸をがらがらって開けると、もうそこが教室なんです。だから、学校の玄関から入って靴を履き替えて廊下を歩いてどっか行った先にある教室じゃないんですね。がらって開けるとそこが教室で、われわれ学芸員が毎週金曜日この時間帯にだけですけども、毎週金曜日はそこにいと、そういう部屋です。

今度、三島小学校の位置をこれから長々とお話しすることになると思うんですが、これ先ほどの衛星写真ですけど、こんな感じですね。房総丘陵から東京湾に向かって流れる大きな川というのが四つあります。多分ご存じと思いますが、養老川、小櫃川、小糸川、湊川です（写真6）。三島小学校というのはこの三つ目の、小糸川の源流に近いところにあります。もう少し詳しく見ていきます。今のを拡大したものです。養老川、小櫃川、小糸川、湊川、その南側に緑の分水嶺がありますが、この辺が房総丘陵で一番、標高の高いエリア、一番人が住んでなくて森が深いエリアです。ここに小学校、この赤い点は小学校です。これいつかっていうと1947年（昭和22年）、いわゆる学制改革というのがあって、今の学校のシステムが出来上がったときですね。



写真6

このとき、この四つの川の源流域には18の小学校がありました。このうち三島小学校はこれです。小学校たくさんあったんですね。これが、今年2018年、もうこうですね。6校しかないんです。3分の1になりました。三島小学校は、残っています。見ていただいて分かると思いますが、

この残っている6校の中でも一番、山奥にある小学校で、実は、2020年にはこの三島小学校もなくなってしまって、この三つしか残らないということがほぼ決まっています。そんな場所ですね。一番、山奥にある小学校なんです。

この三島小教室博物館では、私たち学芸員がそこに金曜日いると、例えば私がいると、子どもたちは私が昆虫のことを何か調べているってことをもう分かっていますから、あのおじさんのところに虫を持っていくと褒められるって分かっていますね。だから僕のところに虫を持ってきます。何か見つけると持ってきます。「先生これ見つけた」って。子どもたちが持ってくるこういう虫は、大抵はですね、「ああ、それよくいるやつだな」っていうそういうものなんです。時々、「え、おまえこれどこで見つけたんだ」っていうような非常に変わったものを見つけてきてくれたりとか。私がそういう反応をすると、子どものほうが、しめたと、あのおじさんを喜ばせてやったぞ、とそういう関係がだんだんできてきてきました。

子どもだけじゃなくて、保護者だったり、おじちゃんおばちゃんだったり、いろいろ来ては、世間話をするかも知れば、「うちに実はこんな古い写真があつてね」って言って何か持ってきてくれるとか、いろんなその地域の情報が集まってくるようになるんですね。毎週やっていますので、毎週毎週、素晴らしい成果が出るわけじゃないんですが、長年やっていると時々、おっと思ふ情報に触れることがあります。われわれ学芸員は専門家ですから、例えば昆虫なら昆虫のことよく知っていますけれど、地域の人たちのすごいところっていうのは、毎日見てるってことですね。私たちどんなに勉強しても、毎日見ることでできませんので、そこは圧倒的になれない。毎日見てる人たちが、毎日見た情報を教えてくれる、届けてくれる、そんな拠点としてこの教室博物館っていうのは、機能していると思います。これもほんの氷山の一角なんですけれど、「こんなもん見たんだけど」っていうような話から論文になったっていうのが、ざっと数えただけでこの五つぐらいありましたね。一つ一つ言いませんけど、私のところに、「実はこんな見つけたんだけど」ていう

ところからスタートして論文にまとめて発表したものをまとめてみました。こんなふう的成果が上がってきています。

最後に、「おばあちゃんの畑」っていう事業もやっています。これ私自身は関わってるわけじゃないんですけども、非常に評判の良い事業ですので、簡単に紹介させていただきます。これは、今はちょっと別の部署に異動している島立さんっていう同僚が始めた事業ですけども、すごく簡単に言いますと、地域に眠っている在来の作物というのがある。眠っているというか、伝えられてきた在来の作物ですね。種屋さんに行って、種を買ってきて畑にまくのではなくて、自分の畑で毎年、種を採り、その種をまき、また種を採りというふうにして繰り返して作ってきた作物です。極端な言い方をするとその地域に合わせて進化してきた作物というのが、日本各地、世界各地にあるんです。それをテーマにした事業です。

清和地区で、三島小のある周辺ですけども、在来作物を研究しようと。で、スタートしました。在来作物、特にこの地域では、畑を作るのは主にその家のおばあちゃんの仕事なので、おばあちゃんの畑って呼んでるんですけど。おばあちゃんたちにいろいろ聞いて、「昔から作っている作物はないかね」って言うと、「それならこういうのがあるよ」って言って、いろいろ、だんだん出てきて、教えてもらって収集してきたものの一部がこれですね。例えばこのヤエナリという、豆の仲間とかシロツカボチャっていうカボチャだったりゴマだったり、あるいは菜っ葉の仲間だったり、コムギだったり、いろんなものがある。しかも、それは食べるだけでなく、例えばコムギの場合だったら、お盆の迎え火にその麦わらを使うといった行事、民俗と結びついている。あるいは、マナ、オカンナといった菜っ葉でしたら、お正月のお雑煮にこれは必ず欠かせないものだ、というふうにしてつながっていたりする。そんなふうに関わってきている。今度、じゃあその作物の種だけじゃなくて、それをどうやって作るか。栽培技術、あるいはそれを収穫して加工して、食品にして食べるというところまで、今度は子どもたちなども一緒になってやる。そういう行事を行ってきました。

最後には、このおばあちゃんの畑のプロジェクトというのは、もう実は博物館の手をだんだん離れつつあって、その地元にNPOができて、そのNPOの人たちが主体となってやり始めて、さらには今、食品加工所まで造って、そうやって畑で作った物を加工してお菓子を作ったりして販売をするというところまで成長してきている事業です。これがおばあちゃんの畑。こんなふうにして、地域の方と私たち学芸員との交流、対話といったところから、最初は世間話みたいなところから始まるんですけども、じゃあこれ面白いからやってみようねって言ううちに、何年かたつとこうやって成長してくるケースもあるということです。

そろそろ終わりに近いんですけども、今お話したような房総の山のフィールド・ミュージアム事業を博物館から見て、どんな位置付けと捉えたらいいのかっていうのを少しマンガにしてみました(図1)。なんだか汚い絵ですけど、博物館って普通は、特にうちの中央博物館というのは、大きな博物館ですか、大きな博物館っていうのは大抵は町に、都会にありますね。町に。立派な建物があって。一方、山っていうのは田舎ですよ。田舎です。都会には大勢の人が住んでいて、田舎には大体、どこでも過疎ですから、人はあんまりいない。

この黄色い顔の人たちは一般市民をイメージしている。そしてこの青い顔をした人たちは、学芸員、研究員ですね。従来の町にある大きな博物館と田舎の関係ってのはこういうイメージです。研究員は大体、博物館にいて博物館の建物の中にこもって何かその資料だとか、標本だとか研究をし

ている。そんなイメージ。一般の市民の方は、博物館を訪れてその展示を見る、資料を見るといった利用の仕方です。たまには、田舎の人も都会の博物館へ遊びに来ることもありますけれども、それは少ない。

一方その博物館に収められているコレクション、私に関わっている自然誌で言えば、昆虫の標本だったり、植物の標本だったりしますけれども、その基になったその貴重な生物っていうのは、多くは山にいます。研究員は時々、山へ出掛けて行って、標本採集して博物館へ持ち帰って資料として保管していくっていう、そんな関係ですよ。こんな感じだと思うんですが、房総の山のフィールド・ミュージアムは、そういう関係に少し違う風を吹かせようと、違う視点を加えようというようなところからスタートしました。この山のほうにある、なんか掘っ立て小屋みたいなもの、これは先ほどの教室博物館のイメージですけども、建物としては粗末。粗末って言っちゃ学校に申し訳ないですが、粗末なところに、まず小さな拠点をつくる。で、そこに研究員が出掛けていくと(図2)。

毎週金曜日にいるって言いましたけれども、そうすると、「金曜日になると、あそこに行けば何か面白いおじさんがいるぞ」、ぐらいのことで、その地域の方も来てくれるようになるわけですね。そこで対話が生まれ、「実はこの間こんなもん見つけたんだけど」という話は、その対話の中から見つかってきて、「それ、もうちょっと詳しく教えてください」みたいなことが始まるわけですね。あるいは、この地域の方々は教室博物館、近所なんで、暇だから行こうかぐら

博物館と山の現場との関係:フィールド・ミュージアム以前

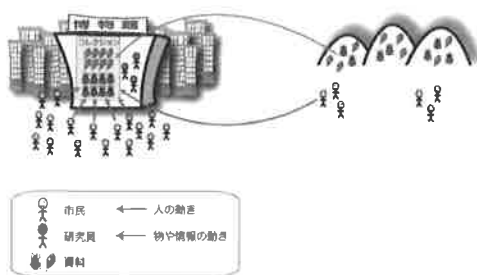


図1

博物館と山の現場との関係:フィールド・ミュージアム以後

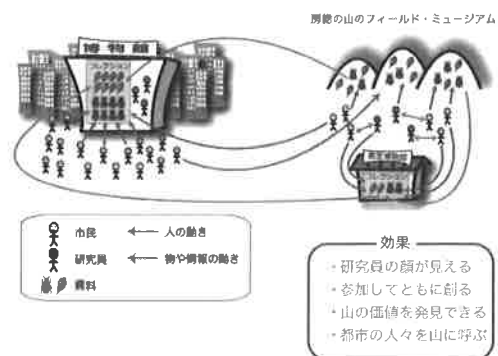


図2

いの感じで気軽に来てくれる。そこでも対話がある。一方で、観察会とか出張展示などの一部は、この都会の人たちの、「なんか山奥で面白いことやってるぞ」で言って来てくれる人もいますね。そういうふうにして都会の人を、これは観光と呼べるほどの規模ではありませんけれども、来てくれることもあるというようになってくるわけです。

というふうに、人の流れが変わってきて、そうするとこの青い矢印で示した物や情報の動きというのが変わってきて、昔は貴重な珍しい物を一方的に採ってきて博物館の中に収めるという関係だったものが、われわれがここに割と頻繁にいることによって、もっとそれが密に情報も集まってくる。物も集まってくるだけじゃなくて、この地域の人たちが私のテーマでいえば地域の自然に関心を持つようになってくれる。そのうち、実は私と共同研究で一緒に論文を書いたりしたような人も、この地域の人の中には出てきたりしてるんですけども。当たり前のように思っていた自分の家の裏の山の自然が、そんなに面白いもんだったとは思わなかった、というような、そういうふうに分たちの身の回りの自然を見直すというふうになってきてくれている。そういうふうを感じています。ですから、このフィールドミュージアムの事業を始めたことによって、人と人との関係、学芸員と市民との関係が変わり、それから物や情報の移動も変わってきたという実感はあります。

その効果としてまとめると、フィールドミュージアム、研究員の顔が見える事業であると。それから、実際に参加して共につくる事業である。市民の側からして参加して共につくる事業であるということ。それから、山の価値を発見できるということ。これまで当たり前だと思っていた山に価値がある面白いということを発見できるということ。そして、多くはありませんけど、都市の人を山に呼ぶという効果もある。こんな効果があると考えています。

もう始めてからそろそろ15年になる事業ですけども、この路線で続けていければと考えています。きょうのお題である、地域との関わり、最後まとめですけども、房総の山のフィールド・ミュージアムの場合には、先ほどの金谷美術

館のお話のように町おこし、町づくりっていうのは少し違ってしまっていて、もう町と呼べるほど人もいないというようなところでの活動ですので、一番大きいのは、地元の魅力を地元の人たちが再認識して下さるとい点ではないだろうかと思えます。

繰り返しますけれども、博物館活動によって、少ないですけども、都会の人を呼ぶ集客活動にはなっているということ。それから博物館行事への参加、ボランティアとして地元の方が参加して下さるといこと。あるいは、実際に調査や資料集めに関わるということによって自然誌や人類誌に、これは私たちが取り組んでいる研究のことですけども、これに参加していただける。あるいは、おばちゃんの畑にあったように在来作物というものを見直して商品化にまで結びつく。そして一番大事だと思われるものは、地域の方々と学芸員との対話であると、そんなことを考えています。まとまらない話でしたけれども、私の報告は以上で終わらせていただきます。ありがとうございます。

質 疑 ・ 討 議

コメンテーター

和洋女子大学人文社会科学系教授 駒見 和夫

パネラー 鈴木裕士・尾崎 煙雄

司 会 奥住 淳

司会：コーディネーターを、和洋女子大学人文社会科学系教授の駒見和夫先生にお願いしております。駒見先生は、大学の博物館の運営等で地域との連携等の取り組みもされておりますので、今日はコーディネーターということをお願いさせていただきました。それでは、この後の質疑討議の進行は、駒見先生の方をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

駒見：和洋女子大学の駒見です。よろしくお願いいたします。コーディネーターということですが、みなさんにもどんどんと意見・ご感想も含めて出していただいて、その交通整理ができればいいかなと思っております。



二つのご講演をいただきました。鈴木さんからは、金谷美術館について、地域を活性化させるためにはひとつの象徴的なものが必要ではないか、その象徴が美術館ということで造られて進めていってほしいということでした。尾崎さんのご講演では、博物館側から、博物館として地域とどうかかわっていくかということだったと思います。建物が無い博物館として、博物館で行われる交流や博物館の活動を通して地域の人々がその地域を知る機会にもなっている。また、そこから地場産業的なものが生まれてたり、地域の人々が自らが住む地域を再発見していく。さらに、

外からも人が集まって、観光の芽生えが生じている。そういう風な活動だと思えます。お二人の

ご講演に対して何か質問等ございませんか。

菅根：千葉経済大学地域経済博物館の菅根と申します。房総のいわゆる「限界集落」に居住しているので、非常に参考になりました。二つほどお聞きしたいのですが。ひとつは、地域の活性化を継続していくために、博物館としては活動の継続をどのように考えてらっしゃいますか。次に、それぞれの施設が自己評価をどのようにしているのか、すなわち入館者増、つまりは広報活動というものにどのような力を入れているのか、特に広報活動への努力を教えてくださいたいと思います。



鈴木：継続の方法というのは、「やめないこと」しかないんです。

菅根：人口1500人、それをキープしていることに意味があるのか、あるいはそれを増やしていくということなのか、それはどちらなのでしょう。

鈴木：理想としては増やしていければいいなと思っているのですが、現状ではやはり人口は減り続けています。一方で、移住者が約40名近く、しかも若い層の方がいまして、今現在結婚された組も3組あって、子どもが4人増えました。ただトータルの流れという形では減り続けています。そうは言っても、やらなければゼロはゼロですので、そこらへんは続けてきた成果だと思っています。その中から、新たな担い手としてお店ができたりとか、新しいライフスタイルとしてフリーランス的な働き方をする若者もずいぶん増えてきま

した。そういう方々は、都会よりはむしろ環境の良いところで仕事をしたいという方がおりまして、そういう方が目立つかなという感じはしております。

では、何が魅力かというのは、これだから来いという形じゃなくて、良さというのは来る方が勝手に見つけてくればいいなと思ってるんです。ただひとつ言えることは、「金谷の町の魅力って何だ」というところは継続的に、石の歴史だったり、アートの歴史だとずっと訴え続けていて、それを止めないこと、続けることで、賛同する方も増えますし、あるいは発信し続けることによっていろんな情報を教えてくださる方がいます。これは、最初から図ったわけではなくて、なんとなく続けてきたから、後からつながっていくんじゃないかなと思って、信じてやっています。

限界集落が金谷にもあるんです。大沢地区とって、世帯で言うと10世帯ないんですよ。そこには、ある東京の大学のサークルが、村おこしじゃなくて「村のこし」ということで、数年前にサークル活動の拠点をそこに置いて、地域の方との活動をされてるんですね。そんなことやってると、横須賀の方からリタイアした方が移住してきたりと、そういう活動を続けることによって、そういう方も出てきたっていう感じでしょうかね。

広報は非常に課題だと思ってるんですが、ホームページなどは整備出来てるんですが、発信力が弱いとよく言われてるんです。たとえば、そういう活動自体をSNSなどで発信し続けるとかに長けた人が今いないものですから、今後どう強化していくかというのは課題ではあります。ただツール自体はいろいろ整ってきています。たとえば鋸山の二か国語のパンフレットを作ったりとか、あるいはホームページも外国語で表記したりと、それをできるだけ多くの方にヒットできるような取り組みを今後もっとやってかなければいけないかなと思っております。

補助金などをいただくと、客観的な指標みたいなものを出すよう言われるんです。金谷の場合の例ですと、例えば鋸山のロープウェイの乗降客のデータ、あとはフェリーの乗降客とか、あとJRの乗降客とかいったものを指標にしています。

菅根：ありがとうございます。

駒見：美術館の入館者数は、地元の人と観光・外部の人と割合はどのくらいなのでしょう。

鈴木：地元は少ないです。ほとんど外部の方ですね。



駒見：そうすると観光客数の増加と美術館の入館者数が比例するのでしょうか。

鈴木：いや、そこがリンクできていないのが我々の課題でして、町おこしと展覧会事業というのが必ずしもリンクできてないんですね。入館者数に結びつけられないというところに力不足を感じます。

尾崎：限界集落の問題、過疎の問題とおっしゃいましたけれども、これ問題の根本は人口分布のアンバランスですから、田舎に問題があるんじゃないかと、むしろ都市に集中していることが問題だと思うんですね。ですので、田舎で活動してこれを解決する手立ては無いと思ってます。ただ、とはいえ博物館がそこで何か活動することによって、元気づけられたらいいとか、楽しんでもらえたらいいなという気持ちはもちろんあります。その意味でもその地域の魅力を再発見することはずっと続けていかなければいけないとは思ってるんです。ひとつ、こういう実例があります。私たちがお世話になっている君津市立三島小学校に関して、君津市教育委員会がその特別な制度を設けて、君津市民であれば、学区の外であっても通っていいですよという制度を作ったんですね。一番山奥の小さい学校ですので、良い環境の中で、しかも少ない子どもたちに手厚い教育ができる、そういうところで子どもを育てませんかという制度ですね。結果、何年間かそれを続けて応募はゼロだったそうです。地元の自治体もそういうことを考えて、何かしらのきっかけは作ってはいるん

ですが、やはり人はそちらの方向へは動かないんだなっていうことを、それを見て感じたところです。

広報に関して、私たちは県立の博物館で、予算が無いなりにそれなりにやってはいます。大きいものとしてはインターネットを使っただけのウェブサイトでの広報、それからメールマガジンを使っただけの広報、あとは印刷物として、A4・4ページの小さい「しいむじな」という冊子を毎年4回発行して、君津市を中心とした地域に手厚く配布しています。それぞれに固定のファンがいて、新たな人を開拓するというよりは、そのファンの皆さんとの定期的な交流という側面が、特に印刷物ではそういう側面が強いかと思います。その記事を読んだ感想など言ってくださるとか、いろんなやりとりがそこで発生しています。

駒見：東大演習林の出張展示などは2000人ぐらい来るといってお話でしたが、これはどういう広報をしているんですか。

尾崎：演習林が中心になってやっています。亀山地区の観光協会がまず大々的に宣伝していて、春と秋にやるんですが、とくに秋は紅葉なので、「関東で一番遅い紅葉」とか言って広報しています。それだけでかなりのお客さんが来て、その一部が演習林の方まで紅葉見物にハイキングで入ってくるという感じで、その方々が2000とか3000人とかいう数字になるということで、博物館としては特に広報はがんばってないんです。

駒見：展示でそれだけの人数が入るっていうのはすごいですね。

尾崎：そうなんです。だから逆なんです。人がたくさん集まる場所に網を張ってという発想です。ただ、実際に見てもらった人たちはとても喜

んでいただいています。たとえば「この山でこんな化石が取れるんですよ」で化石を見せると、とても喜ばれます。

駒見：はい。ありがとうございます。他に何か無いでしょうか。

矢ヶ部：白井市の郷土資料館の矢ヶ部と申します。官という立場の資料館なので、民のマンパワーにすごい感銘を受けました。金谷美術館さんにお聞きしたいのですが、非常に具体的な情報をたくさんもっていらして、すごい感心しているんです。資料館という立場では、町づくりとかの結果・実情というのはなかなか捉えられないんですが、どういう形でその情報が集まってきているのでしょうか。あと、観光協会と連絡を取り合うというか、協働の流れを聞ければと思います。

鈴木：すごい小さい町なんです。皆だいたい顔知ってるんです。苦勞しなくても、だいたい日常の会話の中でわかってしまう。そんなすごいネットワークをもってるわけでは全然なくて、超アナログです。決してシステムティックにやってるわけではございません。観光協会と協働ということなんですけど、協働もなにも、プレーヤーが一緒なんです。商工会とか観光会とか、いろんな組織があつて会議に行けば、出てきてる人はだいたい同じ。それだけコミュニティーが小さいということなんです。

矢ヶ部：対話とあとはお互いのつながりによって、情報がどんどん集まってくるっていうんです。

鈴木：そうですね。これは愚痴になってしましますが、行政が弱いんです。いろいろやるべきだと思っても、なかなか腰を上げてくれなかったり、非常に厳しいんです。だから仕方なくやってくるって感じなんです。

尾崎：私たちの事業は君津市内での行事が多いんですけど、ただ特定の自治体とか特定の地域だけで活動してるわけではないので、あんまり日常的に観光協会とタイアップというようなことはあまり無いですね。ただ、先ほどお話ししたように、演習林の一般公開みたいなときには、観光協会が中心となった企画の一部の末席に加えていただいているみたいな状態だと思うんです。それ以外に観光協会といろいろご相談して何かやるってことはあんまり無いです。



駒見：今日のテーマのなかで、地域との接点をいかに見出していくかというときに、観光協会などといかに関わりをもっていくかというのは、キーポイントになるところだと思います。ここにいらっしゃる方の多くは公立博物館の方が多いと思うんですが、うちの館ではこういう風に観光協会と連携しているんだとか、あるいはつながりがあるんだとかいうのがあったら、お話しいただけますか。白井の資料館はどうなんでしょうか。

矢ヶ部：白井市は梨が盛んなんですけども、市場出しでも利益が出てるといことで、梨狩りを行っている農園さんが非常に少ないのです。観光とは無縁で、観光協会自体が存在しないという現状です。

立和名：千葉県立中央博物館企画調整課の立和名と申します。私は中央博物館に参ります前に、県の観光課というところにおりまして、まさに地域資源をどういうふうで発信していくか、その歴史資源の掘り起こしというものをやっていました。千葉県内には金谷だけじゃなくていろいろな資源が眠っていて、それぞれ地域の博物館の人は本当にその地域の知られざる「え？こんな面白い話があるの」っていうのをたくさん抱えてらっしゃる。しかし、それがうまく発信できてない、リンクされず、知られていないと思うことが多くありました。地元の観光協会とか観光部署の人に聞くと、行政の横つながりがうまくいってないことが多く、うまく地域の魅力を発信できてないという例がけっこう見受けられると思います。

ただ、博物館の方に参りまして思うのは、やはり博物館側もその人的とか経済的理由で、そのどんだんやろうという流れの中に、そのまま学芸員の立場で乗っかっていけるかということ、通常業務をこなしながらはたぶん大変なことだと思います。その辺のバランスをどうとるか、調査研究とか、保存とか、そういうことも考えながら学芸員がやっている仕事と、観光の方の面で面白いところだけを引っ張り出していくというところのバランスをとらないと、その時の一過性で終わってしまうのかなっていう気がしています。金谷とか鈴木さんのところは、NPOで外からも人がたくさん参加して、必ずしもその人たちがずっと暮らしてくれるのが良いことではなくて、たくさん

人がやって来て、ある期間住んでくれるというだけでもその地域は盛り上がっていくのかなと思います。博物館というものがずっとその地域にあって、何でも知っている詳しい学芸員の人がいるとか、地域のことは何でも知っているみたいな、そういうシンクタンク的役割になって、必要な時にそういう観光にも素材を提供できる、人的資源も提供できる、モノが見せられるみたいな存在になれると盛り上がっていくのかなと感じています。

上野：現代産業科学館の上野と申します。博物館が地域づくりとか人づくりに何ができるかとういうと、やはり知的なものの提供ではないでしょうか。鈴木館長のお話の中でもあった石のシンポジウムをやっていることによって、鋸山の石について、かなり専門的な情報が集まって来て、それが発信できる。尾崎さんの話でも、地元の人が地域を知るにより発信できる。地元の観光協会の方は、地元の人といっしょで「町にそんなに良いものは無いだろう」と思ってるんですね。そこに対して、「いやこの地域にこんな素晴らしいものがある」ということを説明していけるのが、博物館の役割ではないかなと思うんです。観光だけではなくて、地域のことに關していろんなことが提供していけるということ、それを日々調査研究して、資料収集して、展示してるということが、博物館の一番の良いことであって、それをないがしろにするとかえって変なことになるのかなと思います。

先日も博物館と図書館と公民館という連携の話を中央博の方々とお話ししたんですが、それぞれの機関にそれぞれ持ち味があって、切り口がある。それを全部いっしょのところでやろうと思っても無理で、それぞれの館が、施設が、機関が、それぞれのやり方によってしっかりと活動して、ただし連携するための窓口は常に開けておくことが、これから必要になってくると思うんですよ。それをコーディネートするのが行政なのか、あるいは地元の住民の方なのかで、そこはまた違ってくると思います。そういうものに対して博物館は常に窓を開けながら、自分の博物館としての使命を作っていく、やっていくということが一番大切なことなんだろうと改めて感じました。

駒見：観光と博物館の、それぞれの立場があって、それぞれの強み・利点を活かしながら連携していくということが必要なんだろうと思います。うち市川にある大学の中の博物館です。市川が観光で何かやろうとしていることは少し前まで知りませんでした。市川にもちゃんと観光協会があって、その観光協会が地元の人たちのNPOである「市川案内人の会」と連携しているんです。市川案内人の会の人たちも市川の良いところを少しでも知らせたい、一方で我々は活動を外にPRしたいけれども、そのPRのノウハウがあんまり無い。それでうまく市川案内人の会と結びついて、市川案内人の会を経て、市川市の観光協会ともうまくつながりをもてました。案内人の会の人たちが市川に訪ねてきた人たちを和洋女子大学の文化資料館に案内してくれると、こちらは案内されてきた人たちに市川の魅力を伝える活動をしています。それも地域連携のひとつだし、地域の魅力を伝えていく役割を博物館として少しでも果たしているのではと思っています。

斎木：千葉県立中央博物館の斎木と申します。博物館というと、入館者数といった評価の問題が出てきます。例えば山のフィールド・ミュージアムには博物館自体はないので、入館者数という概念は難しいですよ。金谷美術館さんの方は、むしろ目的が入館者数というよりは町の活性化とかで、博物館単独の入館者数だけを見ているわけではないんですよ。入館者数以外の何か指標でもって評価してほしいという意識があるのかなというのが気になっていて、数字が出てくるのはまず入館者数ですが、それ以外の評価軸っていうものについて、何かもし良いアイデアがあったら教えていただけませんか。



鈴木：難しいです。でも入館者数は増やしたいと切実に思ってるんですよ。美術館だけじゃなくて、町にやはりどれだけのお客さんが来るかというのも、やりがいていうんですか、意気込みをもってやっています。うちには本当に行政のサポートが無いものだから、自分たちで、募金とか、あとはボランティアなど、いろんな方をお願いして、支えてもらうということをやっています。ただ、美術館が無かったら、今の町はどうなっていたのかなって逆に発想すると、やはりここまでこれなかったと思うんですよ。その石の研究者の方が我々に協力してくれるのは、美術館があって、公益性というものに意気込みを感じてくださるからであって、そういうものがあつたからこそいろいろできてると思うんです。文化事業というのはすぐ結果が出ないので、もうこれはしょうがないところだと思うんです。ただ、私も実は観光の事業がもともとの本業なんですよ。観光施設を営業していますので、昔から観光というものに従事してきて感じるのは、観光を伸ばしていくにはそこには文化的な裏付けとか厚みがないと、付け焼刃で終わるんです。ずっと見えないところで積み上げてきたものというのが一番強くて、やっぱりそういうものが無いと。とくにこれからは国内のみならず海外のお客様がまだまだ増えると思うんです。その国には無い日本独自の何かというものを我々がもっていないと戦えないですし、長続きしないのわかっているんで、町の地域の魅力とか、あるいはもちろん博物館の魅力とか、そこを根底のところから積み上げていく取り組みを地道に続けるしかないんじゃないかなとは思っています。ただ入館者は伸ばしたいです。

尾崎：斎木さんおっしゃるとおりで、私たちのかわっている活動は入館者という概念がそもそも無いんですが、もちろんそのパフォーマンスは何かの数字で表さなければいけないので、観察会の参加者数であるとか、出張展示を見に来てくださった方の数であるとか、数字としてカウントしています。おそらくどの博物館・美術館でも同様の問題をもっていると思うので、博物館業界として考えていかなければならない大きな課題だと感じています。一方で数字にならないものっていうのはたくさんあるわけなんです。現場でいろいろと活

動していると。そこを見て欲しい、そこを評価して欲しいみたいなものがあるんですが、それはいつでも使える弾としてもってる必要があるんだろうなと思うんですね。たいていの場合それはその数字とかではなくて、あるエピソードだったり、



こんなことがあったよっていう。それを意識的に蓄えといて、「よし今だ」っていうんで出すというように。例えば、10数年かかわってきて地域にこんなインパクトがありましたよっていう例で挙げるのが、最初のころ小学生だった子たちがもう20歳とかになってるわけですが、そのうち学芸員を目指して今大学に通っている子どもが、あの小学校から二人出てます。それは、「じつはこんな話がありましてね」というと、届く人には「え、そうなのか」というふうにごう伝わるわけです。だから、あの手この手はやはり考えとかなければとは思いますが。

駒見：例えば「おばあちゃんの畑」で出てきたものなんかっていうのは、まさに博物館の成果では。

尾崎：そうですね。

駒見：中央博認定とかいうような。

尾崎：いや逆なんですよ。おばあちゃんの畑の事業は良い例なんですけども、私たちはだんだんフェードアウトしていつてるんですよ。最初火をつけたのは博物館がきっかけかもしれないですけど、ずっと博物館がかかわっていたら私たちも大変じゃないですか。だからフェードアウトしてるんです。どんどん自立してくださいって。そのうち「博物館って何だったけ」と忘れちゃってもいいくらいの感じで付き合っているんです。ただ、楽しいので関わりは続いています。

駒見：ほかに何か。

矢ヶ部：郷土資料館に配属されて一年目なんです

が、その前は配属の各部署で、農家の方と接触があったり、観光部門を担当したり、自治会など地域との交流というような仕事をしてきました。地域の方々と共同して何かを作っていくべき時代だなとつくづく感じています。地域の方々と行政で、対話でうまくいくときと、いかないときあり、非常にその辺は苦慮しているところではあります。実際にボランティア、それ以外に有償的な、例えば交通費や光熱水費、日当が発生しているかどうかを参考までに聞かせていただければと思います。鈴木：ボランティアは基本的に無償です。交通費もありません。まれに文化庁から助成金などをもたらえた場合などは、交通費は規定どおりお支払いする場合があります。今現在来ていただいている方は無償です。ただ、来ていただいたら、おやつとか飲み物とか、あとは町内のお菓子を作っている会社さんからいただいたお菓子の試食分ですとか、ちょっとお茶のときに差し上げる程度です。ほんと気持ちなんですけど。

空き家利用など来てもらった人の光熱費はこちらもちですね。あとお米とかお味噌なんかも。回覧板で回してもらおうんですよ。「今度こういう人たち来るから協力してくれる」と。じゃ、もう新米獲れたから、去年の米がまだあるからあげるよとか、あとはお魚とれたからあげるよとか。全部ではないんですけどね。

尾崎：ボランティアについてはうちも同じですね。すべて無償です。ただ、唯一傷害保険っていうものがあって、それを博物館の側で入っています。ボランティア保険ですね。それだけはこちらの負



担で入っていますが、あとはすべて無償です。

駒見：地域の人との接点の場として博物館のスタイル、博物館はどのようなスタイルで地域と接するかというものが大事なのではないかと、山の

フィールド・ミュージアムの話聞いていて思いました。場はないけれども、空き教室使ってそこですごくフランクな感じで地域の人と接する、だから地域の人も来やすい。博物館という何かカタい場ではなくてフランクに来やすいかたちになっていると思うんです。皆さん方の博物館で地域と接するときこういう工夫をしているというような、場としての工夫が何かあったら教えていただきたいです。

立和名：うちの博物館の場合は、それぞれ職員の数も多いので、それぞれすごいいろいろなやり方で地域と活動はしていると思います。地域で直接お客さんが来て博物館活動に参加して、教育機関として完結するのではなくて、それぞれの学芸員が、お客さんなり来館者の人と対応したその後が重要かと思います。例えば千葉県は今、千葉県の魅力を県外とか、国外に発信しようとしています。いろんな魅力を積み重ねていこうという活動の中で、地元の公立の博物館として果たす役割は、その子どもたちが例えば博物館で知った千葉の素敵なこと、山のフィールド・ミュージアムで知った房総の山の魅力みたいなものを、他所に行って話せる子になるとか。その子がさらに成長して新たな千葉県ファンを増やしてくれるために、いつでも帰ってこれる核みたいな、そういう場所が地域の博物館としては魅力的な存在なのかなと感じています。博物館は、その魅力を伝える増幅器のような役割があるんじゃないかなと感じています。

駒見：博物館は増幅器としてファンを広げていく、その地域の魅力を知っている人を広げていく、そういうこともたいへん大事なことなんでしょう。地域との接点をいかに見出していくか、地域の活性化にどのように貢献していくことが可能なかということ、お二方のご講演の中にはたくさんヒントがあったかと思います。また、皆さんから出していただいた意見の中にもそれらのヒントはたくさんあったように思います。それぞれの博物館で、今後より地域と結びついていくことは考えていかなければいけないことなのだろうと思います。そうすることによって、博物館の魅力はより高まっていくんだろうというふうに思いました。今日はこれで終わりにしたいと思います。

平成29年度 千葉県博物館協会加盟館園一覧 (平成30年3月末現在)

No.	館 園 名	〒	住 所	TEL	FAX
1	我孫子市鳥の博物館	270-1145	我孫子市高野山234-3	04-7185-2212	04-7185-0639
2	いすみ市郷土資料館	298-0124	いすみ市弥正93-1	0470-86-3708	0470-86-3708
3	市原湖畔美術館 (市原市水と彫刻の丘)	290-0554	市原市不入75-1	0436-98-1525	0436-98-1521
4	稲毛民間航空記念館	261-0003	千葉市美浜区高浜7-2-2	043-277-9000	043-277-9000
5	犬吠埼マリパーク	288-0012	銚子市犬吠埼9575-1	0479-24-0451	0479-24-0449
6	伊能忠敬記念館	287-0003	香取市佐原イ1722-1	0478-54-1118	0478-54-3649
7	印西市立印旛歴史民俗資料館	270-1616	印西市岩戸1742	0476-99-0002	0476-99-2223
8	浦安市郷土博物館	279-0004	浦安市猫実1-2-7	047-305-4300	047-305-7744
9	大原幽学記念館	289-0502	旭市長部345-2	0479-68-4933	0479-68-4445
10	御宿町歴史民俗資料館	299-5102	夷隅郡御宿町久保2200	0470-68-4311	0470-68-4311
11	海岸美術館	295-0014	南房総市千倉町川戸550	0470-44-2611	0470-44-4439
12	香取神宮宝物館	287-0017	香取市香取1697	0478-57-3211	0478-57-3214
13	金谷美術館	299-1861	富津市金谷2146-1	0439-69-8111	0439-69-8444
14	鹿野山神野寺宝物拝観所	292-1155	君津市鹿野山324-1	0439-37-2351	0439-37-2352
15	鎌ヶ谷市郷土資料館	273-0124	鎌ヶ谷市中央1-8-31	047-445-1030	047-443-4502
16	鴨川シーワールド	296-0041	鴨川市東町1464-18	04-7093-4803	04-7093-3084
17	鴨川市郷土資料館	296-0001	鴨川市横渚1401-6	04-7093-3800	04-7093-1101
18	木更津市郷土博物館金のすず	292-0044	木更津市太田2-16-2	0438-23-0011	0438-23-2230
19	君津市立久留里城址資料館	292-0422	君津市久留里字内山	0439-27-3478	0439-27-3452
20	航空科学博物館	289-1608	山武郡芝山町岩山111-3	0479-78-0557	0479-78-0560
21	国立歴史民俗博物館	285-8507	佐倉市城内町117	043-486-0123	043-486-4211
22	佐倉市立美術館	285-0023	佐倉市新町210	043-485-7851	043-485-9892
23	山武市歴史民俗資料館	289-1324	山武市殿台343-2	0475-82-2842	0475-82-2842
24	芝山町立芝山古墳・はにわ博物館	289-1619	山武郡芝山町芝山438-1	0479-77-1828	0479-77-2969
25	城西国際大学水田美術館	283-8555	東金市求名1	0475-53-2562	0475-55-3265
26	白浜海洋美術館	295-0102	南房総市白浜町白浜628-1	0470-38-4551	0470-38-4551
27	市立市川考古博物館	272-0837	市川市堀之内2-26-1	047-373-2202	047-373-2205
28	市立市川自然博物館	272-0801	市川市大町284	047-339-0477	047-339-1210
29	市立市川歴史博物館	272-0837	市川市堀之内2-27-1	047-373-6351	047-372-5770
30	白井市郷土資料館	270-1422	白井市復1148-8	047-492-1124	047-492-8016
31	白井そろばん博物館	270-1422	白井市復1459-12	047-492-8890	047-492-8890
32	宗吾霊宝殿・宗吾御一代記館	286-0004	成田市宗吾1-558	0476-27-3131	0476-27-3135
33	袖ヶ浦市郷土博物館	299-0255	袖ヶ浦市下新田1133	0438-63-0811	0438-63-3693
34	館山市立博物館	294-0036	館山市館山351-2	0470-23-5212	0470-23-5213
35	千葉経済大学地域経済博物館	263-0021	千葉市稲毛区轟町3-59-5	043-253-9111	043-254-6600
36	千葉県酪農のさと	299-2507	南房総市大井686	0470-46-8181	0470-46-8182
37	千葉県立現代産業科学館	272-0015	市川市鬼高1-1-3	047-379-2000	047-379-2221
38	千葉県立関宿城博物館	270-0201	野田市関宿三軒家143-4	04-7196-1400	04-7196-3737
39	千葉県立中央博物館	260-8682	千葉市中央区青葉町955-2	043-265-3111	043-266-2481

No.	館 園 名	〒	住 所	TEL	FAX
40	千葉県立美術館	260-0024	千葉市中央区中央港1-10-1	043-242-8311	043-241-7880
41	千葉県立房総のむら	270-1506	印旛郡栄町竜角寺1028	0476-95-3333	0476-95-3330
42	千葉市科学館	260-0013	千葉市中央区中央4-5-1	043-308-0511	043-308-0520
43	千葉市美術館	260-8733	千葉市中央区中央3-10-8	043-221-2311	043-221-2316
44	千葉市立加曾利貝塚博物館	264-0028	千葉市若葉区桜木8-33-1	043-231-0129	043-231-4986
45	千葉市立郷土博物館	260-0856	千葉市中央区亥鼻1-6-1	043-222-8231	043-225-7106
46	長南町郷土資料館	297-0121	長生郡長南町長南2127-1	0475-46-1194	0475-46-1194
47	DIC川村記念美術館	285-8505	佐倉市坂戸631	043-498-2672	043-498-2139
48	流山市立博物館	270-0176	流山市加1-1225-6	04-7159-3434	04-7159-9998
49	成田山書道美術館	286-0023	成田市成田640	0476-24-0774	0476-23-2218
50	成田山霊光館	286-0021	成田市土屋238	0476-22-0234	0476-22-0242
51	成田市三里塚御料牧場記念館	286-0116	成田市三里塚御料1-34	0476-35-0442	0476-35-0442
52	成田市下総歴史民俗資料館	289-0108	成田市高岡1500	0476-96-0080	0476-96-0080
53	成田羊羹資料館	286-0032	成田市上町500	0476-22-2266	0476-22-1661
54	野田市郷土博物館	278-0037	野田市野田370	04-7124-6851	04-7124-6866
55	野田市立中央小学校教育史料館（休館中）	278-0037	野田市野田611	04-7122-2116	04-7122-2117
56	菱川師宣記念館（鋸南町歴史民俗資料館）	299-1908	安房郡鋸南町吉浜516	0470-55-4061	0470-55-1585
57	廣池千九郎記念館	277-8654	柏市光ヶ丘2-1-1	04-7173-3023	04-7173-3988
58	ふなばしアンデルセン公園子ども美術館	274-0054	船橋市金堀町525	047-457-6661	047-457-7584
59	船橋市郷土資料館	274-0077	船橋市薬円台4-25-19	047-465-9680	047-467-1399
60	房総浮世繪美術館	297-0222	長生郡長柄町大庭172	0475-35-2001	0475-35-2001
61	松戸市立博物館	270-2252	松戸市千駄堀671	047-384-8181	047-384-8194
62	松山庭園美術館	289-2152	匝瑳市松山630	0479-79-0091	0479-73-6716
63	睦沢町立歴史民俗資料館	299-4413	長生郡睦沢町上之郷1654-1	0475-44-0290	0475-44-0213
64	茂原市立美術館・郷土資料館	297-0029	茂原市高師1345-1	0475-26-2131	0475-26-2132
65	八街市郷土資料館	289-1115	八街市八街ほ800-3	043-443-1726	043-443-1726
66	八千代市立郷土博物館	276-0028	八千代市村上1170-2	047-484-9011	047-482-9041
67	夢紫美術館	289-0313	香取市小見川581	0478-83-1089	0478-83-1092
68	芝山はにわ博物館	289-1619	山武郡芝山町芝山298	0479-77-0004	0479-77-1393
69	和洋女子大学文化資料館	272-0827	市川市国府台2-3-1	047-371-2494	047-371-2494

MUSEUMちば 第45号

2018年5月31日

発行 千葉県博物館協会

〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2

千葉県立中央博物館内

TEL 043 (265) 3111

<http://www.chiba-web.com/chibahaku/index.html>

編集 千葉県博物館協会調査研究委員会
